

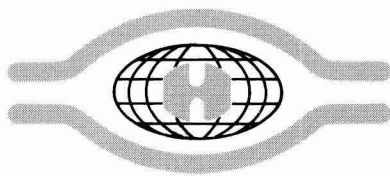
HEIBON
SHA'S
WORLD
ENCYCLO
PEDIA

世界 大百科 事典

3

ウーエホ

平凡社



世界大百科事典 3

1981年4月20日 初版発行
1982年印刷
全36巻揃現金定価 145,000円

編集兼発行人 下中邦彦
発行所 平凡社
郵便番号102
東京都千代田区三番町5
振替東京8-29639番
電話03(265)0451番

本文用紙 十条製紙株式会社
グラビア用紙 山陽国策パルプ株式会社
多色オフ
見返用紙 日清紡績株式会社

本文写植製版 フォト印刷株式会社
本文印刷 株式会社東京印書館
グラビア製版印刷 株式会社東京印書館
多色オフ 株式会社光村原色版印刷所

クロース ダイニック株式会社
表紙箔押 斎藤商会
製本 和田製本工業株式会社

© 株式会社平凡社 1981 Printed in Japan

凡 例

●見出しのつけ方●

《表音見出し》

1. 日本読みのものは〈現代かなづかい〉による〈ひらがな〉書きとし、促音・拗音は小字とした。ただし、お列長音は〈う〉、〈ち・づ〉は〈じ・ず〉とした。
2. 外国読みのものは、外来語を含めて〈カタカナ〉書きとし、長音は〈音びき〉(一)を用いた。略語は、とくに原語読みの普及しているもののほかは英語読みに従った。
3. 中国・朝鮮などの人名・地名は、慣用の漢字読みで出したが、現地読みに近い慣用読みのあるものはそれによった。
4. 日本語と外来語との合成語は、日本語の部分は〈ひらがな〉、その他は〈カタカナ〉とした。

《本見出し》

1. 日本読みのものは、〈漢字〉と〈ひらがな〉を用いた。〈ひらがな〉書きのもので、表音見出しとまったく一致するものは省略した。
2. 外国読みの項目には、原則として原語(あるいは語原を示す語)を入れた。ただし、ギリシア語、ロシア語その他、特殊な文字のものはローマ字におきかえて入れた。
3. 日本語と外国読みとの合成したもの、は、〈漢字〉〈ひらがな〉〈カタカナ〉をあわせ用いた。

《項目配列の方法》

1. 表音見出しの五十音順とし、促音・拗音も音順にかぞえ、清音、濁音、半濁音の順序とした。
2. 〈音びき〉(一)のあるものは〈音びき〉のないものの後にした。
3. 同音のものは、おおよそつぎのような順序で配列した。
 - a. 表音見出しの〈カタカナ〉→〈ひらがな〉。
 - b. 本見出しのないもの→〈カタカナ〉のもの→〈ひらがな〉のもの→漢字のもの。
 - c. 本見出しが漢字のものは、第1字目の画数の少ないものを先にし、第1字目が同字のものは順次第2字以降の画数による。
 - d. 同音同字のものでは、普通名詞→固有名詞。
 - e. 外国人名では、ファミリー・ネーム(同一の場合はパーソナル・ネーム)のアルファベット順。
 - f. 日本地名では、自然地名→行政地名→その他の地名。

●文体と用語・用字●

1. 漢字まじり〈ひらがな〉口語文とし、かなづかいはおおむね〈現代かなづかい〉に従い、漢字は原則として当用漢字を用いた。ただし、原典の引用、固有名詞、歴史的用語その他は例外として扱い、必要に応じて()内に読みがなをつけた。
2. 動・植物名、元素名、化合物名、鉱物名で当用漢字のないもの、日本神名および〈カタカナ〉を慣用としている特殊の語は〈カタカナ〉書きとした。
3. 年代は、原則として西洋紀年を用い、必要に応じて日本・中国その他の暦年をつけた。
4. 度量衡は、原則としてメートル法を用いたが、慣用に従って尺貫法、ヤード・ポンド法を用いた場合もある。

●外国語について●

1. 欧文の地名・人名については、可能なかぎり現地読みに近いものをとったが、慣用の読み方に従って例外としたものも少なくない。
2. ギリシア語、ロシア語のローマ字へのおきかえはつぎのようにした。
 - a. ギリシア語
η=e ω=o x=k χ=ch
 - b. ロシア語
a=a б=b в=v г=g д=d
e=e ё=yo ж=zh з=z и=i
й=i к=k л=l м=m н=n
o=o п=p р=r c=s т=t
y=u ф=f x=kh ц=ts ч=ch
ш=sh щ=shch ъ=' ы=y
ь=' э=e ю=yu я=ya
3. 上記のほか、欧文の地名・人名の〈カタカナ〉による表記は、おおむねつぎの基準に従った。

berg〔スウェーデン〕〈ベリー〉 Strindberg ストリンドベリー

cu〔スペイン〕〈クァ・キ・クェ・クォ〉 Ecuador エクアドル

d〔独〕語末では〈ト〉 Wieland ヴィーラント

de〔仏〕〈ド〉 de Gaulle ド・ゴール

dou〔仏〕〈ドゥー〉 Doumer ドゥーメル

du〔英・仏〕〈デュ〉 Durand デュラン

Dumas デュマ

du〔独〕〈ドゥ〉 Durst ドゥルスト

er〔英・独〕語末では〈アー〉 Parker パーカー; Herder ヘルダー

g〔独〕語末では〈ク〉, ngは〈ング〉, igは〈イヒ〉 Hamburg ハンブルク; Lessing レッシング; König ケーニヒ

gn〔仏・伊・スペイン〕〈ニャ・ニュ・ニエ・ニョ〉 Auvergne オーヴェルニュ; Bologna ボローニャ

gu〔伊・スペイン〕〈グァ・グィ・グェ・グォ〉 Paraguai パラグアイ

ia〔一般〕語末では〈イア〉 Asia アジア

io〔伊〕〈ヨ〉(拗音) Boccaccio ボッカッチョ; Giorgione ジョルジョーネ

j〔スペイン〕〈ハ行音〉 Juárez フアレス

je〔一般〕〈イェ〉 Jena イェーナ

ley〔英〕〈リー〉 Huxley ハクスリー

ll〔スペイン〕〈リャ・リョ〉, 南アメリカでは〈ヤ・ヨ〉 Castilla カスティリャ; Trujillo トルヒョ

oi, oy〔仏〕〈オワ〉 Boileau ボワロー

pf〔独〕〈プ〉 Pfizner ピッツナー

ph〔ギリシア〕〈フ〉 Aristophanes アリストファネス

qu〔伊・ラテン〕〈クァ・クィ・クェ・クォ〉 Quirinius クィリニウス

ray〔英〕〈レー〉 Thackeray サッカーレー

son〔英〕〈ソン〉 Edison エディソン

sp, st〔独〕語頭では〈シュプ・シュト〉 Spranger シュプラング; Storm シュトルム

stew, stu〔英〕〈スチュ〉 Stewart スチュアート; Stuart スチュアート

swi〔英〕〈スウィ〉 Swift スウィフト

thi, ti〔一般〕〈ティ〉 Thiers ティエール; Tiziano ティツィアーノ

thu, tu〔独・ラテン〕〈トゥ〉 Tum-lirz トゥムリルツ; Tacitus タキトゥス

thü, tü〔独〕〈チュ〉 Thürnau チュルナウ

tou〔仏〕〈トゥー〉 Toulon トゥーロン

tu〔英・仏〕〈チュ〉 Tunisia チュニジア

v〔ラテン〕〈ウ〉 Vergilius ウェルギリウス

v〔スペイン〕〈バ行音〉 Verasquez ベラスケス

w〔独〕〈ヴ〉 Wagner ヴァーグナー

x〔一般〕〈クス〉 Xenophon クセノフオン

y〔ギリシア〕〈ユ〉(拗音) Dionysos ディオニュソス

zi〔独〕〈チ〉 Leipzig ライプチヒ; ただし語頭では〈ツィ〉 Zimmermann ツィンマーマン

zi〔伊〕〈ツイ〉 Venezia ヴェネツィア

zü〔独〕〈チュ〉 Zürich チューリヒ

●符号・記号●

《かこみと送り》

- 【 】 中見出し語をかこむ。
- 〔 〕 〈本見出し〉に出る動・植物の漢字および本文中の小見出し語をかこむ。
- 〈 〉 書名または題名をかこむ。

別刷図版目次

ヴァティカン	13～16
ヴァン・アイク	25～26
ヴァン・ダイク	35～36
ウェヌス	93～94
ヴェルサイユ	103～104
ヴェルメール	121～122
浮世絵	139～146
ウシ・ウマ	163～164
宇宙開発	213～218
ウメ	275～276
雲仙天草国立公園	325～326
映画	367～370
エーゲ文明	435～436
エコール・ド・パリ	445～446
エジプト美術	455～462
エスキモー	471～472
X線	497～498
江戸時代美術	531～534
エトルリア	543～544
愛媛	569～570

ウ

う 有 インド哲学の用語で、漢訳仏典で有と称する。原語に於いて三つの意味がある。(1)サット sat インドの神話では天地開びやくの始源的存在。真実の存在、第一義的存在を意味し、のちにブラフマン(梵)と同義となる。(2)ブハーヴァ bhava 存在、存在するものの意。(3)ブハヴァ bhava 鳥波(うば)とも音訳し、とくに仏教で生死輪回(りんね)する状態を意味し、これを空間的に欲、色、無色の三有、さらに九有、二十五有に細分し、また時間的には生、本、死、中の四有に分析している。(山崎 次彦)

う 禹 中国、夏王朝の始祖と伝えられる神話伝説上の人物。《書経》の〈禹貢〉や《史記》の〈夏本紀〉によると、太古の堯(ぎょう)、舜(しゅん)の時代に、大洪水がおこり、民衆が苦しんだので、帝は鯀(こん)に治水を命じた。しかし鯀は治水に失敗して殺され、子の禹がその業をついだ。禹は后稷(こうしやく)とともに13年間苦心をかさね、ついに治水に成功し、舜から天下を譲りうけて夏王朝を開いたといわれる。禹を始祖とする夏の国は山東省地方にあったと推定されるから、当然黄河のはんらん悩まされたであろう。この悩みの中から、この伝説は生まれたとも考えられる。この伝説の特徴は、ノアの洪水伝説のように自然に治まったのではなく、禹が人力を尽して治水にあたったことが強調されていることである。しかしこのような大規模な治水が太古の世に行われえたとはいえられないから、おそらくこの伝説の成立は、治水事業が現実に盛んに行われた戦国時代までさがるものと思われる。このほか禹と父の鯀については、《書経》の〈洪範〉、《山海経》《国語》《墨子》、《楚辞(そじ)》の〈天問〉、《呂氏(ろし)春秋》《淮南子(えなんじ)》などに、いろいろの神話的要素に富む伝説がしるされている。(大島 利一)

う 竽 中国および日本の管楽器。笙(しょう)の大形のものをいう。→笙

う [鶇] *Phalacrocorax* 大形黒色の水鳥。ウ科に属する。くびが長く、脚は短く体の後方につき、後指は内側に位置し、4指間にみずかきがある。くちばしは細く直であるが、先端は鋭かき状に曲がる。顔とどの皮膚はゆるく、裸出する。潜水が巧みでよく魚を捕食するため中国や日本ではならして鵜飼(うかい)に用いる。日本で用いるのはウミウ(海鵜) *P. capillatus* で、翼長は31~35cm、体は、緑色を帯びた黒色で、頭側の白色部に灰黒色の小斑を密布する。本州では冬鳥で、主として外海に生息し、岩上に巣をつくる。近似のカワウ(河鵜) *P. carbo* は留鳥で、一年じゅう日本に生息し、海湾、湖沼、河川などに住み、マツなどの高い樹上に巣をつくる。頭側は皮が柔らかく白

色で、黒色部は青みを帯びる。果は樹枝、海藻などでさら形に造り、12月から6月ころまで3回くらい繁殖する。一腹3~6卵、雛は無毛で弱々しく、親鳥ののどに頭を入れ、嗦(そ)囊中の半ば消化した魚を食べ、巣立ちまで47~60日もかかる。→鵜飼 (今泉 古典)

ヴァイオリン Violin 擦弦楽器の一種、通常Vnと略記され、ヴィオラ、チェロ、コントラバスとともにヴァイオリン属と総称され、これらのうち最高音楽器で、音域は約4オクターブにおよぶ。弦は4本でそれぞれ右下図のように調弦される。音が人声のソプラノに似ており、性能もきわめてすぐれているところから、〈楽器の女王〉とよばれることがある。本来は単旋律楽器であったが、演奏法の発達とともに、重音の演奏も可能となった。音色はひじょうにゆたかで、その表現力は、もっとも叙情的なものから、急速な、または劇的で力強いものにいたるまで、きわめて多様であるため、独奏楽器としてはもちろん、合奏の分野でももっとも重要な役割を与えられている。

胴は、中空の共鳴体で、一般にカエデ、エゾマツ、コクタンなどの木材を組み合わせて作られ、全長約60cm(そのうち胴が約36cm)、横板の幅約30mmのものが標準型であるが、子ども用として、普通の大きさの $\frac{3}{4}$, $\frac{3}{8}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{8}$ (胴の容積の比較)などがある。弦をささえる〈こま〉は、同時に、弦の振動を表板に伝えて共鳴させるはたらきをする。この共鳴は、こまのE線側の脚のすこし下方、表裏両板のあいだに立っている、棒状の魂柱(こんちゅう)によって裏板に伝えられて、胴全体の共鳴となり、その振動音は、f字孔から外部に拡散される。E線には、19世紀末ころから、通常スチール弦をもちいるようになっていく。A線にはガット(羊腸)弦または巻弦(ガットなどを心にして細い金属弦を巻いたもの)、D、G線には巻弦がもちいられ、E線はきびきびした音色をもち、A線は繊細優美で、D線はやわらかく温かみがあり、G線は力強く荘重な音色をもっている。弓身は、ペルナンブコなどの木材でつくられ、その長さは約75cm、弓毛には馬の尾毛がもちいられる。弓の下端のねじで毛の張力を加減できる。付属品としては、松やに(弓毛にすりつける)、弱音器(こまの上に立てて音を小さくする)、アジャスター(おもにE線の調弦のさいもちいるねじ)、あごあて、肩あてなどがある。

演奏するにあたっては、ヴァイオリンを左肩と左あごでしっかりとささえて楽器を水平にたもち右手でもった弓で、弦を、こまと指板のあいだのところこすって音をだす(運弓)、左手の指先で弦を指板上におさえてさまざまな音をだす(運指)。独奏曲の場合には立ったままで、合奏の場合には腰かけて演奏する。

【発達】violinの語原であるイタリア語ヴィオリーノviolinoは、小さいヴィオルviolの意味で、その起原はヴィオルだという説もあるが、またヴィオルそのものの起原もヴァイオリンと同じだという説もあり確実なことはわかっていない。しかし、数多くの古い弦楽器の歴史をたどると、すでに13世紀ころ左肩にのせて弓をつかった弦楽器があったことも証明されており、また15世紀末から16世紀前半にかけて、ヴァイオリンに最も近い型をした、リラ・ダ・ブラッチョlira da braccio(腕のリラ)が作られているので、これがヴィオルとヴァイオリンとの共通の起原ではないかという説もある。いずれにせよ、今日のヴァイオリンが生まれるまでには、少なくとも数個の楽器のそれぞれの特徴が集結されたものとみられ、その起原を探るためには、中世紀のリラ、レベック、ジューグ、フィドルなどから、古代のキタラまで綿密にたどらなければならぬとされている。しかし弓でひく擦弦楽器の原産地はアジアとする説が有力で、アラビアのラバブあるいはレバブが、サラセンのスペイン占領によって10世紀ころヨーロッパに入り、レベックを生んで、ヴィオルさらにはヴァイオリン成立の土台を作ったらしい。歴史的起原はともかく、ヴァイオリンの初期の製作は、16世紀の中ごろ以後からイタリアでもっともさかんとなったが、フランス、ベルギー、ドイツなどもヴァイオリン製作に独特の歴史をもっている。しかし、なんといっても、イタリアが最古、最高の伝統を誇っており、とくにクレモナ派の、アマティ家、ガルネリ家、ストラディヴァリ家は、ヴァイオリン製作の三大名家である。なかでも、アントーニオ・ストラディヴァリは、現代ヴァイオリンの標準型を設定した人で、ストラディヴァリ家とクレモナ派の代表者であるばかりでなく、世界最大の製作者として知られている。また彼の師匠であったニコラ・アマティは、大アマティとして知られ、その門弟には、ナポリ派の創始者ガリアーノA. Gagliano、ガルネリ家の始祖であるアンドレア・ガルネリやグランチーノP. Grancinoなどの名家が多数輩出して、それぞれ歴史的な名器を今日に伝えている。

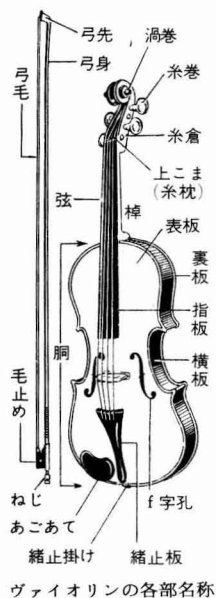
このように17世紀後半にヴァイオリン製作が隆盛をきわめた一つの理由は、ルネサンス以後の人間尊重の精神が、しだいに人間感情を具体的に個性的に表現しようとする要求を深め、その結果、独唱や独奏に新しい価値がみとめられて、人



ウミウ

左は開放弦の調弦、右は音域





ヴァイオリンの各部名称

声の魅力とともに、それに似た単旋律独奏楽器としてのヴァイオリンがひじょうに愛好されるようになったためである。しかもこの時代に作られた手工業的楽器が、20世紀以後近年にいたるまでのすべての近代科学による改良案をもよせつけぬほどすぐれていることは一種の神秘とさえいわれている。

一方弓の構造は18世紀にはいて種々の改良が行われ、今日の型がほぼ完成した。トゥールト父子、とくに子のフランソワ Francois Tourte (1747~1835)は弓の製作者として最もすぐれ、彼らの改良によって軽快で自由かつ安定した弓の運動が可能となり、ヴァイオリン奏法は大きな進歩をした。

【ヴァイオリン音楽】初期ヴァイオリンの製作が16世紀中期以後のことであり、それがルネサンスの新しい人間の要求と不可分のものであることは既述のとおりであるが、楽曲のなかにヴァイオリンという名称がもちいられたのは、16世紀の終りのころである。17世紀にはいと、モンテヴェルディの《オルフェオ》(1607)のなかの二つのヴァイオリン・ソロを伴うオルフェオのアリア(詠唱)《全能の霊よ》Possente Spirtoをはじめ多くの作品が書かれはじめている。またトレモロ、ピチカートなどの技巧も、すでにモンテヴェルディらの作品に使用され、ヴァイオリンは時代の花形となりはじめた。B.マリーニの《ロマネスカ》(1620)は最古の独奏ヴァイオリン曲の一つであり、S.ロッソ《種々のソナタと舞曲》(1622)はトリオ・ソナタの前身といわれ、1627年には、ファリーナが《突飛な奇想曲》というヴァイオリン小曲集を発表して、ハーモニックスやコル・レーニョ(弓身で弦を打つ)などの新しい技巧を追加している。また最古のヴァイオリン・ソナタといわれるG.B.フォンターナ(?~1630)の作品もそのころ(年代不詳)作られたと推定されている。そのほか重音楽法や高音位置での奏法が案出され、ヴァイオリンはあらゆる意味で最も豊かな表現をもつ楽器となり、1600年ころ以来発展してきた単一の旋律を浮き立たせるやり方としてのホモフォニー(単音楽)の手法にも適応したので、独奏楽器としてますます発達するようになり、17世紀から18世紀前半までには、イタリアを中心としてドイツ、フランス、ベルギーなどにも多くの作曲家が出てヴァイオリン興隆時代を出現した。一方これと並行して管弦楽も形をととのえてゆき、ヴァイオリン属がその主要楽器の座をしめた。また、

ルネサンス以来、器楽合奏形態の発展にともない多数のヴァイオリン属の擦弦楽器が生まれたが、18世紀を境にその機能を4種に集約したヴァイオリン属がこれにとって代わった



コントラ・バス



チェロ



ヴィオラ



ヴァイオリン

既述のように楽器製作の巨匠が輩出したのもこの時期であった。作曲上で、前記のような初期の種々の試みから形態的な完成に到達した最初の巨匠はコレリである。彼はレグレンツィ(1626~90)やG.B.ヴィターリのあとをうけて、ソナタを独奏曲あるいは室内楽の重要な曲目に仕上げたが、それは形式においては教会ソナタ sonata da chiesaと室内ソナタ sonata da cameraとであり、楽器の組合せはトリオ・ソナタ trio sonata(ヴァイオリン2と、通奏低音すなわちチェロ1および鍵盤楽器1)と、ソロソナタ solo sonata(ヴァイオリン1と通奏低音)の形をとった。もう一つの重要な分野、協奏曲でも、コレリはコンチェルト・グロッソ(合奏協奏曲)の完成者であった。彼はヴァイオリン奏者としても有数の大家であり、カンタービレの美しい音色と表情に富んだその奏法はイタリア・ヴァイオリン音楽の黄金時代を開いた。コレリと同時代のG.トレリ(1658~1709)も大きな存在で、彼はソロ・コンチェルト(独奏協奏曲)の分野を開拓し、それはヴィヴァルディに引きつがれて、急—緩—急の3楽章形式による独奏協奏曲が確立される。むしろこの2人においても合奏協奏曲を含む他の分野も同様に重要であるが、独奏部の重視とその技巧的な発展が大きな流れを形づけてゆき、彼らのあとに名人たちの群がむらがることになる。コレリ門下のジェミニアーニ(1687~1762)、ソーミス(1686~1763)、ロカテリ(1695~1764)ら、およびヴェラチーニ(1685~1750)、タルティーニ、その門下のナルディーニ(1722~93)、プニャーニ(1738~98)らがそれである。彼らは演奏家であり作曲家であった。中でも抜群の存在はタルティーニで、名人芸的な技巧とすぐれたソナタによって名高い。こうしたイタリア音楽の花々が諸外国に移植され、あるいはそこから刺激をうけて、各国固有の音楽的財産が形成される。フランスでは、17世紀に管弦楽とその演奏の規範をきずいたイタリア出のリュリがおり、独奏の分野では18世紀に、ルクレール(1697~1764)、ソーミス門下とフランクール(1698~1787)が一派をなした。ドイツでは、17世紀に独自の個性を示したビーバー(1644~1704)があり、18世紀前半には、J.S.バッハが、ヴィヴァルディ様式による協奏曲や、あの比類のない無伴奏のソナタとパルティータを書き、コレリの作風をうけたヘンデルの合奏協奏曲とソナタや、フランスのロココ様式をとりいれたテレマンの作品も登場した。1750年を境とする音楽様式の変化はヴァイオリン音楽の上にも反映した。新様式は、マンハイム楽派の創始者でチェコ出身のJ.シュタミッツらを先達とし、ハイドンや、ヴァイオリンの明澄な美しさをみかいたモーツァルト(彼自身天才的奏者でもあった)、それにはげしさと精神的な深みを加えたベートーヴェンら古典派の作曲家によって成就された。あらゆる器楽の曲種に共通する形式として古典ソナタの形が整備され、ヴァイオリン音楽としては、ピアノとの二重奏ソナタ、および管弦楽との独奏協奏曲の形が代表的曲種として確定した。また管弦楽曲や室内楽曲(弦楽四重奏曲その他)においても、ヴァイオリン属

は決定的に重要な役割を与えられた。また古典派は明快さと力動感の美を求めたが、近代奏法の父といわれるヴィオッティが、弓の改良と相まって奏法を革新し、こうした時代の美的要求にふさわしい表現力をヴァイオリンのために開拓した。ところでこの時代から作曲家と演奏家の分業が大きく現われてきて、作曲家の内には、創作という行為を通じて自分の音楽的思念や人間感動を語るという自覚が高まってきた。したがってヴァイオリン音楽の創作は、従来圧倒的に多かったヴァイオリン奏者が自分の技法のために作曲するゆき方よりも、ヴァイオリニスト以外の作曲家が自分自身の創意によって創作するゆき方が主流となった。その一方演奏面ではますます高度の技術にみがかかけられ、名人芸の時代を生んだ。その代表者はパガニーニであり、彼をはじめ、シュポーア、ヴェータン、ヴィエニアフスキーらの協奏曲やサラサーテの小曲など、彼らの名技のための作品も今日なお演奏されているが、彼らの意義はむしろヴァイオリンの表現の可能性を拡大し高め、それを作曲家に提供したことにあるといえるだろう。だから19世紀以降のヴァイオリン音楽史は作曲中心に見た一般音楽史に密着することとなり、19世紀ロマン派のおもな作品には、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームス、ラロ、サン・サーンス、チャイコフスキー、ドヴォルジャークらの協奏曲や、フランク、ブラームス、フォーレのソナタ、ショーンの詩曲などがあげられる。20世紀前半にはドビュッシーとラヴェルのソナタ、バルトークとプロコフィエフの協奏曲とソナタが高い評価を得ているほか、グラズーノフ、シベリウス、シェーンベルク、ストラヴィンスキー、ベルク、ハチャトゥリヤンらの協奏曲などが、急激な音楽様式の転換とそのさまざまな傾向を反映しながら、大きな位置をしめている。ところで、19世紀以来のヴァイオリン奏者の系譜についてふれると、19世紀には、まずヴィオッティの直接の影響はバイヨ、P.ロードおよびA.シュタミッツ門下のクロイツェルのフランス派3巨匠やベルギーのCh.A.ペリオに引きつがれ、マッサー、ヴェータン、マルシック、イザイエらと続くフランス・ベルギー派が栄えた。この派からは、ポーランド出のヴィエニアフスキー、スペインのサラサーテ、ハンガリーのフーバイらも出て、その影響力は全ヨーロッパに広がった。ヴィオッティにくらべると、パガニーニは全く孤立した存在であった。ドイツ、オーストリアでは、シュポーアのあとを受けて、F.ダヴィド、ヨアヒム、ドントらが、チェコではシェフチックが、演奏・教育の両面に活躍し、ハンガリーもまた前記ヨアヒムを筆頭に、その門から、アウアーと前記フーバイの二大家を出し、今日に至るまで重要な人脈を作っている。20世紀前半には、フランス・ベルギー派の系列から、優美な演奏に一世を魅了したクライスラー(オーストリア、作曲もある)とティボー(フランス)、近代奏法のすぐれた指導者フレッシュらが出、つづいてフーバイ門下で新即物主義による大きな影響を投げかけたシゲティ(ハンガリー)、アウアー門下のハイフェッツ(ロシア、ア

ヴァイオリン属の大きさの比較

メリカ),エネスコの弟子メニューイン(アメリカ),ソヴェトの巨匠オISTRAフらが、現代的スタイルと卓抜した技術をもって大きな足跡を残している。

(園部 三郎)

ヴァイガチとう ヴァイガチ島 **Vai-gach I.** 北極海にあるソヴェト連邦領の島。ノヴァヤ・ゼムリヤの南島と、カラ海峡をはさんで相対する。北西より南東に長く、長さ約100km、幅45km、面積3,383km²の小島。南および南東の沿岸はきりたっている海食崖をつくる。ロシア人およびサモイェード人が少数居住し、夏季は漁鯊に従事する労働者が来島する。多数の沼沢や湖がある。(小堀 巖)

ヴァイキング Viking 北ヨーロッパのスカンディナヴィア半島、とくにスウェーデンで行われる食事形式のスモールガス・ボード *smorgas bord* (スモールガスはオードブルの冷前菜, ボードは食卓)の俗称。多種のオードブルが並べられ、その数はときに50さらにも及ぶことがあり、各自が好みに応じてとって食べる。北ヨーロッパの長い冬ごもり用の保存食をもちよって食べたことから始まったともいわれる。8~10世紀ころヨーロッパ各地の沿岸を荒しまわった海賊のヴァイキング、またはその住む地方で好んで食べた料理からこの名称が出たともいい、また食卓にたくさん並べた料理を各自の好みにしたがって自由にとって食べるのが、あたかも海賊が沿岸に上陸し手あたりしだいかすめとるのに似ているところから出た名称ともいわれる。並べられる料理の種類は元来は冷菜で、サケの薫製、ニシンの酢づけや油づけ、薄切りの肉片、アンチョーヴィなどであるが、日本では分けどりの便宜上中国料理が多く利用され、冷菜のみならず暖かい料理も並べられる。料理屋で一定料金で好きなものを食べようだいに食べられる方式が好まれ、日本でも流行している。

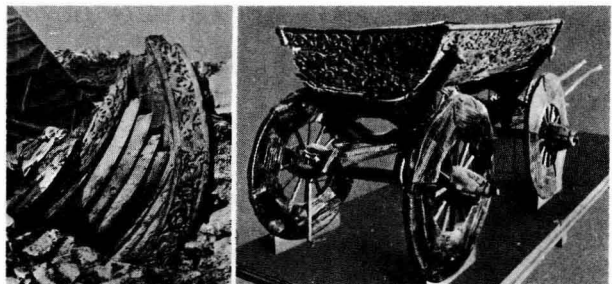
(川島 四郎)

ヴァイキング Vikings 8~10世紀、ヨーロッパに活躍した北方ゲルマン族の総称。ノルマン人、デン人(ノルマン)の異名をもつ。(1)西ヨーロッパをその活動舞台としたのは、デンマーク系、ノルウェー系のもので、すでに8世紀後半、イングランド、アイルランド、スコットランドおよび大陸ではフリースラントを襲撃している。9世紀にはいると、彼らはしばしばガリアに侵入して、ナント、トゥールーズ、ルーアン、パリなどの要地を襲撃したが、840~850年、大陸ではロワール、セヌ河口に、イングランドではテムズ河口にそれぞれ定着した。イングランドでは、878年、アングロ・サクソン国王アルフレッドによって北方に追われ、10世紀を通じてアングロ・サクソン人と同化し、その活動は衰退した。これに対して大陸では、911年、西フランクのシャルル愚鈍王が彼らを懐柔してその活動をおさえようとし、その首領ロロをノルマンディー公に封じた。翌年、彼らはキリスト教に改宗して、それ以後フランク人と同化していったが、彼らの定着および建国の第1段階はこのノルマンディー公国の建設をもって終る。1017年、デンマークのクヌート大王が来襲して全イングリ

ドを征服し、スカンディナヴィアの版図とあわせて大ノルマン帝国を建設し、同じく11世紀初め、ノルマンディーのノルマン人によって、サラセン領のシチリア島および南イタリアが占領され、ナポリ王国が建設された。建国の第2段階がこれであるが、前者はクヌートの死後まもなく崩壊し、1066年、ノルマンディー公ギヨームがこれに代わってイングランドを征服し、ノルマン朝を開いた(ノルマン・コンクエスト)。また後者は12世紀初めまで勢威をふるい、教皇にくみして叙任権闘争に介入した。ロベール・ギスカル、ルジエロ1世の兄弟が名高い。

(2)東ヨーロッパでは、スウェーデン系のものが9世紀以来、カスピ海、黒海方面などに進出して、ノヴゴロド(862, リューリクの王国)およびキエフに建国したが、スラヴ人と交流して11世紀後半以来、しだいにスラヴの要素に支配されて衰退していった。(北村 忠夫)

【ヴァイキング文化】ヴァイキングの活躍した8~10世紀における北ヨーロッパの文化。この時代の経済は農業をもとし、農民は三圃(さんぼ)制の農耕を営み、多数の家畜を飼育していたが、村落はまだ共同体の色彩が強かった。手工業もしだいに興り、これにつれて商業もさかんとなり、この商業の中心地として町や村が成立しはじめた。スウェーデンのビルカ、ヘデビー、ノルウェーのスキリニッサルなどは、こうしてできた町で、中央に城があり、周囲に土壁をめぐらし、その外側には墓地を有していた。取引にはまだ銀塊が使われていたが、北ヨーロッパでは8世紀の末に粗末な銀貨が铸造されはじめ、貨幣の铸造は11世紀以後本格的になった。それまではアラビアやイギリスなどの貨幣が大量に輸入され、流通していた。ヴァイキングの海外活動によって、西ヨーロッパ諸国はもちろん、ビザンティンの文物も北ヨーロッパに移植された。ノルウェーでは、アイルランドのケルト人が製作した銅板製バケツ、金銅馬具、香炉、聖遺物箱、各種飾金具などが大量に出土し、相互の交流の緊密さを物語っている。そのほかイギリス、フランク王国などから持ち来たらされた品も、北ヨーロッパ各地から少なからず出土している。これらはすべて墳墓から発見されているが、火葬と土葬とがならび行われ、デンマーク以外では、王はもちろん、一般人民さえ副葬品豊かな墳墓を作った。墳墓形式は舟墓 *boatgrave* が支配的で、遺体は男女の別なく船首の高い船の中央にすいたベッドに安置し、車両、武器、各種器物、財宝などを添えて埋めた。火葬するときは、船もろともにその場で焼いて、埋めている。これらの副葬品から当時の工芸をみると、初めはカロリング朝文化の影響が強かったが、930年ころからはケルト美術やアラビア美術が強く影響したことがわかる。とくに飾身具などにはすぐれた技術が示されている。木彫や墓碑に見える浮彫の画像なども、ようやく洗練されたものとなったが、しかし表現はまだまだなく、奇妙な動物文が愛好され、アルカイック美術の範囲を脱しきっていない。前代から使用されていたルーン文字は、整理され16文字となったが、表音を完全にするため1000年こ



ヴァイキングの遺物。
左は舟、右は車。いずれも1903年ノルウェーのオーセベリーで発掘されたもの

ろには7文字が追加された。ルーン文字で書かれた墓誌は、文学作品としても史料としても重要である。この時代は、海外先進文化を吸収するの追われ、創造的な文化を育てえなかったが、こうしてつちかわれた地盤の上にやがてキリスト教文化をとり入れることによって、北欧文化の本格的な発展が始まったのである。

(角田 文衛)

ヴァイクセルバウム Anton Weichselbaum 1845~1920 オーストリアの病理解剖学者。1885年ウィーン大学の病理組織学および細菌学助教授となり、86年肺炎球菌の一種を発見記載し、その翌年脳脊髄膜炎球菌を発見記載した。93年同大学の病理解剖学教授となり、1916年その職を退くまで腫瘍(しゅよう)学、糖尿病や関節および軟骨の病理学に多く貢献した。また結核研究に多くに尽力し、その撲滅にもいろいろと対策を講じた。オーストリア最初の結核療養所アランドの設立に当っては大いに力をいれた。

(大島 蘭三郎)

ヴァイゲルト Carl Weigert 1845~1904 ドイツの細菌学者、病理学者。1879年フランクフルト・アム・マインにある研究所の病理解剖学教授となり、85年に同所の所長となった。1871年初めて細菌の染色を試み、ことにアニリン染料を用いる研究にこわしく、さらに組織標本の染色についても多くの業績をあげた。これらの業績はエールリヒ、ルー、リッペルトらに対し、ひじょうに大きな影響を及ぼした。損傷を受けた組織の修復は実際に必要な程度以上に行われることを証明していっそうその名を知られた。

(大島 蘭三郎)

ヴァイシェーシカがくは ヴァイシェーシカ学派 インド六派哲学の1。ヴァイシェーシカは〈勝論〉と漢訳し、〈かつろん〉と読んでいる。インド自然哲学の代表的なもので、ニヤーヤ学派と姉妹関係にある。この学派はヴェーダ聖典の権威を一応認めている点で婆羅門(ばらもん)教系統に属するが、その哲学説は仏陀(ぶつだ)時代の自由思想家である六師外道(ろくしげどう)、とくにジャイナ教の影響をうけ、仏教部と似寄った思想傾向をもち、非婆羅門教的色彩が濃厚である。開祖はカナダで、前150~前50年ころの人と見られる。この学派の根本経典を《ヴァイシェーシカ・スートラ》と称し、カナダの著と伝えられるが、現存のものは1~2世紀ころの作である。その他文献としてはプラジャスタバーダの《パダアルタダルマサングラハ》(句義法綱要)、慧月(ca. 550~650)の《勝宗十句義論》(漢訳)があり、よく読まれている。またウダヤナの《キラナーヴァリー》、

シヴァーディトヤ(11世紀)の《サブタパダアルティー》などがあり、これ以後ニヤヤ学派との融合が顕著になったが、シャンカラミシュラ(15世紀)は《ウパスカーラ》(経の注釈)を著わし、アンナンバッタ(16世紀)の《タルカサングラハ》をはじめ数種の綱要書が作られている。

【教理】この学派の考究の対象はダルマ(法)であるが、これには二つの方面がある。第1は祭祀(さいし)を重んじ、生天すなわち天における受楽をもたらすもので、ヴェーダ聖典を絶対の権威とするが、これによっては真の解脱(げだつ)に達しない。第2は解脱をもたらすもので、これが本学派の本領とする教理である。すなわち現象世界を客観的に分析して実体、属性、運動、普遍、特殊、内属(実徳業同異和合)の六句義を立てる。句義とは存在の根本形式を実在視したものである。実体(実)には、地水火風の四元素(四大)と虚空、時間、空間、我(アートマン)、意(マナス)の9種をあげ、四元素の原因に原子(アヌー)を認める。属性(徳)として色、香、味、触、数、量、別異性(別体)、結合、分離、かなた(彼体)、こなた(此体)、知覚(覚)、楽、苦、欲求、嫌悪(順(しん))、意志的努力(勤勇)の17を認め、この数は後世増加した。つぎに運動(業)は上昇、下降、収縮、伸張および進行(取捨屈伸行)の5種。普遍(同)と特殊(異)は関係概念を実在化したもので上位の類概念と下位の種概念にあたる。以上の五句義は実体を中心に内属の関係にあるゆえ内属(和合)なる句義をたてる。ただし《勝宗十句義論》ではこれに有能(自果を生ずる力)、無能(他果を生じないこと)、俱(く)分(普遍にして特殊)、無説(非有)を加えて十句義とし、ウダヤナ以後は無説のみを加えて七句義説も用いられた。この学派はこのように機械論的自然観にもとづく多元的実在主義であって、それゆえ因果論においても機械論的に因中無果なる積集説を主張している。したがってもととも無神論であるが、ブラシュタパーダは主宰神を認め、以後有神論化した。知識論としては合理主義に立ち、感覚(現量)と推論(比量)のみを知識根拠とし、聖典による知識(聖言量)を独立の根拠と認めない。この学派は経験による観念の後天的発生説を主張し、ミーマーンサー学派の観念本有説に反対した(声無常論)。以上の六句義を学び、ヨーガを修して輪回(りんね)の原動力である不可見力を減して解説を得ることがこの学派の目的であるが、またヴェーダ聖典の規定に従って祭祠布施を行い、昇天をできるようにすることをもすすめている。

(勝呂 昌一)

ヴァイシャ Vaiśya 古代インドの身分階級制度である四姓制度(ブラーフマナ、クシャトリーヤ、ヴァイシャ、シュードラより構成)の第3階級。漢訳仏典では吠舍(べいしゃ)、毘舍(びしゃ)と音写。いわゆる庶民階級に相当し、農業、牧畜、商工業に従事した。上流2階級と同じく、この階級の成年男子はウパナヤナUpanayanaと称する入門式を受けて、ヴェーダの学習が許された。この入門式は宗教的再生と信じられ、それゆえ上流3階級は再生族 dvija と呼ばれ、シュードラは一生族 ekaja とされた。ヴァイシャは後世

のカースト制度におけるバニヤーBanyā(商人カースト)に相当する。

(増原 良彦)

ヴァイス Gustav Wayss 1845～1923 ドイツにおける鉄筋コンクリートの応用と研究面における開拓者。1886年モニエの特許を買収した彼は、鉄筋コンクリート構造専門の商社を創立しプロイセン政府が彼の商社における実験に参加せしめたケーネン M. Könen とともにコンクリート構造方法の基礎理論を確立した。92年商社社長の地位をケーネンに譲ったが、後ふたたびヴァイス・ウント・フライターク会社を設立して鉄筋コンクリート工法の普及に貢献した。19世紀末から今世紀初めにドイツを中心に鉄筋コンクリートが応用・研究されその声価を確立したが、ヴァイスの貢献はとくに傑出している。

(村松 貞次郎)

ヴァイス Pierre Ernest Weiss 1865～1940 フランスの物理学者。ミュールーズの生まれ。チューリヒ工科大学、エコール・ノルマルに学び、教授資格をとる(1894)。1895年レンヌ理科大学講師、99年リヨン理科大学講師を経て、1902年チューリヒ工科大学教授、18年ストラスブル大学教授兼同大学付属物理学研究所長。26年フランス科学アカデミーの会員にえられた。彼の研究は磁気のはほとんど全般におよんでいる。分子間の相互作用に起因する分子の磁場を想定することによって、理想気体に関するランジュヴェンの常磁性体理論(1905)を一般化し、強磁性体にも適用を拡張した(1907)。この〈分子の磁場〉は古典論に基礎づけられえなかったけれども、この構想のもとに多くの実験事実を整合することによって、理想気体に関するランジュヴェンの常磁性体理論(1905)を一般化し、強磁性体にも適用を拡張した(1907)。この〈分子の磁場〉は古典論に基礎づけられえなかったけれども、この構想のもとに多くの実験事実を整合することによって、理想気体に関するランジュヴェンの常磁性体理論(1905)を一般化し、強磁性体にも適用を拡張した(1907)。この〈分子の磁場〉は古典論に基礎づけられえなかったけれども、この構想のもとに多くの実験事実を整合することによって、理想気体に関するランジュヴェンの常磁性体理論(1905)を一般化し、強磁性体にも適用を拡張した(1907)。

(田村 松平)

ヴァイストゥーム Weistum 質子帳 Urbar, 寄進帳 Traditionsbuch とならんで中世ドイツ荘園制研究に不可欠の史料。その法制史、経済史、文化史的価値は高い。邦訳では〈判告書〉〈法宣示書〉と呼ばれ、その集成はヴァイスチューマー Weistümer, すなわち〈判告集〉と呼ばれている。8世紀以来の荘園の発展に伴ない、荘園内における領主および農民の権利、義務が複雑化し、荘園慣習法を固定化する必要から、これを記録したものである。これは領主および農民両者の発意によるとされる。現存するものは、11世紀末あるいは12世紀初めから、16世紀を頂点として19世紀に及んでいる。内容は一般に、既存の古い法と慣習との確認を主とし、また地代、賦税、諸貢租に関する荘園法的諸規定を根幹とするが、後には13世紀以後の農民の地位の向上を反映して、農民の自治的色彩を濃厚に付加するようになった。一般に、領主、農民両者の問答形式をとるのが特徴である。豊富なゲルマン法象徴主義の素材は、近代以後、形だけとして残るにすぎない。

(北村 忠夫)

ヴァイスホルン Weissshorn 西部アルプスの東、ペンニン・アルプス(ヴァ

リザー・アルペン)の山。標高4,505m。マッターホルンの北微東15km、ピラミッド形の峰で、初登頂は1861年ティンダルによる。南につづくツィナル・ロートホルン(4,223m)、オーバー・ガベルホルン(4,063m)、ダン・ブランシュ(4,357m)をあわせてエヴォレーナ・ツィナル山群と呼び、東側ニコライ谷をへだてモンテ・ローザ山群に対する。(戸谷 洋)

ヴァイスマン August Weismann 1834～1914 ドイツの動物学者。フランクフルト・アム・マインに博物学教授を父として生まれた。幼時から動植物を好み、こん虫を飼ったりしていた。ゲッティンゲン大学で医学を修め、しばらく開業医をしていたが、その後ギーゼン大学のロイカルトのもとで、短期間ではあったが、動物の発生学、形態学などを学んだ。1863年フライブルク大学医学部の講師、次いで助教授・教授となり、引退するまでそこで講義した。初めは顕微鏡的研究をおこなっていたが、30歳ころから眼病に悩むようになり、そのためそれまでの研究を中止して、以後はもっぱら理論的・思索的研究に転じ、有名な〈生殖質連続説〉を完成した。同説を根拠とした彼の進化学説の講義は、同教室を世界的なものとし、その門下から幾多の俊秀が出た。生殖質連続の思想は R. オーエンやヘッケルにその芽ばえを見ることができ、彼はそれを体系化し発展させ、それを根幹として遺伝・進化の問題の解明を試みた。すなわち体細胞と生殖細胞とをはっきり区別して考え、前者に起った変異は絶対に遺伝せず、後者に影響が及んだ場合のみその変異は遺伝するとした。また生物の進化は自然選択のみによると考え、器官の用・不用や外界の直接影響が種の変遷にあずかることを絶対に否認している。このため、その説は〈ネオ・ダーウィニズム〉と呼ばれる。その学説は学界の注目をひき、賛否の論争がさかんにおこなわれ、その後の進化論に大きな影響を及ぼした。また彼は母の資質を受けて芸術にも関心があり、音楽を愛し、余暇には自らピアノを弾じてなぐめていたという。主著に〈生殖質〉〈進化論講義〉がある。→ネオ・ダーウィニズム

(深川 泰男)

ヴァイセンフェルス Weissenfels 東ドイツ南西部、ハレ県の小都市。人口41,153(1977推定)。ライプチヒの西南西36km、ライプチヒ〜ヴァイマル間の鉄道に沿う。市街はチューリンガー・ヴァルトの北につづく丘陵とエルベ川支流のザーレ河岸に位置し、製紙工場、製粉工場、機械工場があり、また醸造も行われる。17～18世紀におけるこの地方の手工業ギルドの中心地であり、1656～1746年の間ザクセン・ヴァイセンフェルス小公国の首都で、当時の城が残っている。

(水津 一郎)

ヴァイツ Georg Waitz 1813～86 ドイツの歴史家。シュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の生まれで、はじめ法律を修め、サヴィニーにも師事したが、のちランケに歴史を学んでその高弟となった。1840年以来ベルツの協力者として《メヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ》を

編集(75年からは編集主任)した。42年キール大学教授になると政治問題にも関与し、デンマークに対し祖国の利益を擁護、フランクフルト国民議会では皇帝派として活躍した。49年以降政治から身を引き、ゲッティンゲン大学に招かれ、中世史研究の権威として、その精密な学風で多くの俊秀をその下に集めた。主著《ドイツ国制史》(1844~78)は確実な史料操作に基づく画期的な著述。そのほか《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン史》(1851~54)のような歴史叙述もあるが、ダーム編集の《ドイツ史料集》の3~5版を増補改訂した功績はとくに大きく、同書はその後も版を重ねて今日なお重用されている。(成瀬 治)

ヴァイツ Theodor Waitz 1821~64 ドイツの人類学者、哲学者。1844年、マールブルク大学の哲学私講師となり、62年以降同大学の教授となる。ヘルバートの影響下に、意識過程をもって現実的变化と認め、自然科学としての心理学を哲学の基礎とした。アリストテレスにも傾倒して、ヘルバート学派の中では、かなり特色をもった学者である。人類学者としてのヴァイツは、その6巻にわたる大著《未開民族の人類学》Anthropologie der Naturvölker(1858~71)で名高い。58年、この著作の第1巻が出版されるや、学界に多大の反響をまき起し、63年には、ロンドンの民族学協会の手により「人間に関する大陸の論説」の代表として翻訳された。ヴァイツは、この著書において心理学の人類学を提唱し、また各住民の身体的遺伝と文化的遺産との連関を究明することに努力した。呪術(じゅじゅつ)に関する学問的関心を早くから促進せしめたのも彼である。このようなヴァイツの心理学的所説は、アメリカ人類学の父ボアズにも深い影響を与えている。主著には前記のほか、《心理学の基礎づけ》Grundlegung der Psychologie(1846)、《自然科学としての心理学教程》Lehrbuch der Psychologie als Naturwissenschaft(1849)、《一般教育学》Allgemeine Pädagogik(1852)がある。(綾部 恒雄)

ヴァイデマイヤー Joseph Weydemeyer 1818~66 アメリカにおける先駆的共産主義者。ドイツのウェストファリアにプロイセン軍人の子として生まれ、若くして砲兵士官となる。このころ《ライン新聞》を通じてマルクス、エンゲルスらに近づき、共産主義者となる。1848年三月革命に参加したが、革命がゆきなやみ、弾圧を避けて一時スイスに、51年にはアメリカに亡命。翌52年アメリカ最初のマルクス主義者団体「プロレタリア同盟」を結成し、また同年、共産主義新聞《革命》Revolutionを主宰し、《共産党宣言》をアメリカに紹介した。奴隷問題をめぐる南北対立に際しては、マルクス主義の立場から積極的な奴隷制廃止論者として活躍し、61年南北戦争の発生とともに大佐として参戦、リンカーン大統領によってセント・ルイス地方の指揮官に任命された。66年、アメリカ労働組合の初期の全国組織である全国労働同盟NLUの創立に尽力したのち、セント・ルイスにおいて病没した。(平野 秀秋)

ヴァイデン Rogier van der Weyden ca. 1399~1464 フランドルの画家。トゥールネーに生まれ、ブリュッセルに没した。すでに1426年には故郷で相当の尊敬をはられ、36年にはブリュッセル市所属の画家となり財政的にも豊かな生活に恵まれた。1449~50年のローマ旅行によってイタリア・ルネサンスの新風にふれたものの、彼の作風にはそれほどいじるしい変化がおこらなかった。彼は15世紀フランドルでは、おそらくヴァン・アイク兄弟につぐ大画家といえよう。そして当時の多くの北欧画家たちのように、彼にもまたヴァン・アイク兄弟の影響は十分に認められるが、それにもまして彼の独自性は、人体の彫刻的表現の巧みさであり、ヴァン・アイク兄弟にみるような自然描写に対する関心や愛着の少ないことである。これは彼の父が彫刻家であり、彼自身そこから出発しているためとも思われる。彼の作品は宗教的な題材のものが多いが、ここでもまたヴァン・アイクの作品よりも、もっと情的な、深い宗教的感情の表現に重点をおいている。しかも彼の芸術は新しいものめざましい出発というよりは、ゴシックによってつちかわれたもののみごとな完成といえてよいであろう。色彩は明るく部分色を強調し、素描と肉づけは、やさしさのうちにも確実によく締まっている。彼の作風が15世紀後半の北欧画家に与えた影響はむしろヴァン・アイク以上である。代表作としては、ボーム市立病院の祭壇画《最後の審判》、スペインのエスコリアル《キリスト降架》、アントワープの《七秘跡》などがあるが、とくにミュンヘンの《三博士の礼拝》は、彼の晩年の傑作として、また色彩の美しさにおいて、15世紀フランドル絵画の最高作の一つといわれている。ほかに肖像画も少なくない。(嘉門 安雄)

ヴァイデンライヒ Franz Weidenreich 1873~1948 ドイツ生まれの人類学者。シナントロプスの研究で名高い。はじめ医学を学び、シュトラスブルク大学で血液学に関して多くの業績をあげた。第一次世界大戦後、1921年ハイデルベルク大学に移り、骨の組織学から進化の問題へとしだいに分野を拡大し、20年代に後年の化石研究の基礎を固めた。26年には初めてヴァイマルのエーリンクスドルフ化石頭蓋(とうがい)について論文を書いている。34年ドイツを去ってシカゴに移ったが、翌35年中国に渡り、北京協和医学院教授と中国地質調査所新生代研究室主任を兼ねて、周口店のシナントロプス発掘に打ち込んだ。日本軍の侵入によって発掘を断念し、セッコウ模型を携えてふたたび渡米し、晩年はニューヨークの自然史博物館に籍を置き、学界望の《シナントロプス頭蓋》The Skull of Sinanthropus(1943)をはじめ幾多の画期的論文を完成して世を去った。これらは人類学史上最も完全な報告とされている。(山口 敏)

ヴァイトリング Wilhelm Weitling 1808~71 ドイツの初期社会主義者。仕立屋の出身。ドイツ亡命者左派による「正義者同盟」の指導者として、スイス、イギリス、ドイツその他で、活発な社会主義運動に献身したが、マルクスとあいに



ヴァイデン 《キリスト降誕》もとミッデルブルフの寺院の祭壇画 1450年代後半

れず、社会主義運動の主流を離れた。1849年アメリカに亡命し「共産村」の設立を企てたが失敗し、ニューヨークで死んだ。著書に《人類の現実と理想》(1838)、《調和と自由の保証》(1842)、《貧しき罪人の福音》(1843)があり、その理想とする平等社会の未来図を描いた。フーリエ、オーエンの流れをくむ空想的社会主義者として、ドイツ最大の人である。(矢田 俊隆)

ヴァイニングャー Otto Weininger 1880~1903 《性と性格》という著書をのこし、23歳で自殺したオーストリアの思想家。人間の精神生活にはもうろうとした思想以前の段階「ヘニデー」henidēsがあり、女性はこのなかで思考すると主張し、最も低級な男性も最も高級な女性より、なお限りなく高級であるという極端な女性蔑視(べっし)論をのべた。女性を母型と娼婦型に分けたのも彼である。ショーペンハウアーやカントの影響はあるが、性の形而上学者として独特の存在である。(宮城 音弥)

ヴァイブラフォン Vibraphone 鉄琴 に属する打楽器。おもに軽音楽の演奏とくに小編成のコンボで好んで用いられている。だいたい3オクターブの音域の鉄製音板が木琴と同様に音階的に並べられ、各音板の下にチューブ共鳴管を備えている。この共鳴管の内部には横軸に配列された金属製円板(ファン)があり、これを電気モーターで回転させ、共鳴管内の空気に震動を与え、上部の音板をたたけば余韻あるヴィブラートの音を生ずる。楽器の名称もここに由来している。またペダルがあり、この余韻をとめることも可能である。ばちの頭部は普通硬質ゴムに毛糸を巻いたもので、柄はトウでできている。独奏楽器としてテンポの遅い曲や単純なコードの演奏に効果的であるが、一面ホットでスピーディーな曲の演奏にも適する。(藤井 肇)



ヴァイブラフォン

ヴァイマル Weimar 東ドイツ南西部、エルフルト県にある都市。人口62,787(1977推定)。エルベ川の支流イルム川左岸の肥沃な谷にあり、豊かな森林に恵まれている。古くから職人的な加工業が発達しており、現在も鋳物、車両、電気器具、精密機械、光学器械、などの諸工業および出版が盛んである。市街は中世都市のおもかげを残しており、旧市街には曲がりくねった狭い道、高い切妻屋根の家が立ち並んでいる。カール・アウグスト公(在位1775～1828)およびその後継者の治下、この地はドイツの芸術、自由主義の中心地でゲーテ、シラー、ヘルダー、ヴィーランドらにゆかりのある建物が多く、ゲーテが1782～1832年の間住んでいた家(現在ゲーテ博物館)、ゲーテが散歩したイルム河畔の公園、シラーの家(現在は博物館)、シラーの戯曲が数多く上演された劇場、ゲーテ、シラーの墓などが残っている。またこの劇場でリストが音楽指揮者を勤め(1848～59)、ヴァーグナーの《ローエングリン》が初演された。ニーチェがその生涯を終ったのもこの地である。1919年ドイツ共和国の議会がここで開かれ、ヴァイマル憲法が制定された。ナチ時代にはヴァイマルの北西部外にブーヘンヴァルト強制収容所が建てられた。第二次世界大戦中に中心部は戦災を受けたが、現在は復興し、ふたたび芸術・文化の中心地として美術・建築・音楽の各大学をもち、演劇の上演も盛んである。(水津 一朗)

ヴァイマルきょうわこく ヴァイマル共和国 1918年から33年まで続いたドイツ共和国で、ふつうヴァイマル共和国 Weimarer Republik と呼ばれる。

〔成立〕ドイツ国民は第一次世界大戦(1914～18)に先だつ1912年の総選挙ですでに帝政を見捨て、民主派と社会民主党を議会の多数派たらしめたが、第一次大戦の総力戦体制は民主共和派にとって不利であり、1918年のドイツ革命は国内革命運動の結果としてではなく、敗戦と、戦勝国によるドイツ民主化の要求の結果として突発した。この革命により帝政はたおれて共和制が成立したが、一般国民が新生の共和国をみる目は冷たく、祖国の屈辱と腐敗の象徴であるかのごとく考えていた。ドイツ革命の直後、スパルタクス団を中心とする共産派は大胆な権力闘争をはじめ、1919年1月にいたるまで動乱がつづいたが、共産派にたいする国民の支持はきわめて少なく、1月15日、同派の一揆(いっき)の敗北をもって終わった。1月19日の総選挙は温和共和派の勝利に終り、2月11日、社会民主党首領エーベルトが大統領に選出され(在職1919～25)、ついで同党幹部シャイデマンが議会主義にもとづく連立内閣をつくった。内閣を形成した民主共和派(社会民主党、民主党、中央党)を世にヴァイマル連合派と呼んでいる。当時は各地になお共産系の政権が存在していたので、政府は旧帝政軍部の参謀将校団を根幹とする新しい軍部(国防軍)を組織して1919年5月までに共産派を鎮定した。そのため民主共和国の中核に早くも国防軍(帝政保守派)の権力が組み入れられたのである。戦勝国はその間、共産派の興起をおさえ、

帝政保守派の再起を妨げるためにヴァイマル連合派をしきりに支持した。6月28日に調印された酷烈なヴェルサイユ条約は、以上の形勢の産物でもあり、ドイツは全海外領土を失い、膨大な賠償金を負われ、本国領土の13%、本国人口の10%を失い、ラインラントを戦勝国に占領され(1930年6月まで)、ライン右岸その他では軍備を禁止された。8月11日に民主共和主義によるヴァイマル憲法が公布された。ユンカーの政治的支配権が消滅し、東ドイツ農村の半封建的特権が廃止され(大土地所有の分割は行われなかったが)、政治運動と労働運動の広範な自由が認められ、支配権力が重工業界と銀行界の独占資本家の手に移り、ユンカーもまた基本的には資本家の農業企業家(伝統にもとづく農民支配はなお維持したが)に変化した点に国内の民主化が認められた。

〔発展〕国内の再建は極端に困難であった。国富は減少したのに戦勝国と自国民の要求はふえていた。政府は強大な労働運動と直接に対峙せぬために、インフレ政策を強行し、実質賃金を切り下げて利潤率の増加をはかった。生産を拡張しつつ賠償支払を可能な限度にとどめたので、1923年1月、フランス、ベルギー軍はルール地方を占領した。ドイツ政府は占領軍に対する〈消極的抵抗〉によってこれに反抗したが、生産の停滞とインフレの激化によって秩序は乱れ、社会革命が実現しそうになった。フランス側もドイツ人の抵抗で悩んだので、英米の仲介で独仏が歩みより、1924年4月ドーズ案が成立してドイツの通貨も安定し、賠償支払も円滑化した。以後ドイツはアメリカ合衆国の資本を借り入れて賠償支払、生産設備更新、社会政策などを行い、流入した外資は260億マルク(公私借款と直接投資)にのぼり、国富の増進に達した。こうしてアメリカ資本を中心とするドイツと戦勝国の共存親善関係が確立し、世界平和が進展した。1928年には生産は戦後の最高に達し、ルールの重工業はヨーロッパ工業生産額の大半を生産し、バルカンや中南米その他における海外経済活動も活発化した。文化と科学の進歩も著しかった。

〔外交関係〕戦勝国がドイツを迫害していた間は、ドイツはソ連邦と結んで戦勝国に対抗した。1922年4月、独ソ間に結ばれたラバロ条約は、その現われである。ドイツ軍部は、ヴェルサイユ条約による武力の制限と軍用飛行機、タンク、毒ガス、潜水艦、重砲以下の禁止規定をくぐるためソヴェト赤軍と結び、ソ連邦領内に禁止された兵器のための演習場、訓練学校などを設け、赤軍の強化にも協力した。東ヨーロッパに市場をもつドイツ重工業資本家がこの政策の支持者であり、彼らは、1927年以後はドイツ本国にも秘密の軍需工業を設けて秘密の再軍備につとめた。しかしドーズ案以後は西ヨーロッパ諸国との関係も好転し、1925年10月ロカルノ条約が結ばれ、1926年9月国際連盟加入が許されたうえ、常任理事国のポストすら与えられた。1930年1月ヤング案が結ばれて賠償負担はさらに軽減された。イギリスは、終始ドイツの強化策を支持して、ソ連邦またはフランスによ

るヨーロッパ支配の実現を妨げようとした。ドイツ外相シュトレゼマン(在職1923～29)は、西ヨーロッパとの協調につとめて国内復興に必要な外資を導入しつつ、他方ではソ連邦との友好も維持し、東西両陣営の対立を利用しつつ国力を伸ばそうとした。

〔崩壊〕ヴァイマル共和派の内治外交が失敗を重ねるにつれて保守帝政派がたえず増大し、1924年以来支配的勢力となった。議会が小党分立で成績をあげないので、重工業と金融資本と結ぶ軍部と官僚が政治上の実力者となり、1925年4月ヒンデンブルク元帥が大統領に当選した。ドイツの復興が完成した1928年以来、支配階級は、ヴェルサイユ条約を破棄して帝国主義政策を強行する決意をなし、政界は急激に右傾した。1929年秋、世界経済恐慌が激化するやアメリカは対独投資を引きあげたので、ドイツ経済界は破滅的打撃をうけ、1932年には失業者600万人を数えるにいたり、国民生活は極度に窮乏した。国民は、現体制に絶望してナチ共産党に走ったが、とくに国家主義と社会主義を結びつけて宣伝するナチは、ヴェルサイユ体制下に苦しむ国民の上下に広く共鳴者をうみ、青年と婦人の支持者が多く、1930年9月の選挙では一挙に第2党になった。社会革命を恐れ、軍備拡張を欲する資本家と軍部と官僚の同党支持者が増したので、1932年には第1党になった。宰相ブリューニング(在職1930～32)は、左右両翼をおさえつつ、軍部と大統領の権力をバックとして保守中道派による独裁政治を行ったが、ついに保守帝政派は、ブリューニングを見捨ててナチとの連立政権を画策し、やがて1933年1月に第三帝国を成立させた。→ドイツ革命 →ヴァイマル憲法

(村瀬 興雄)

ヴァイマルけんぼう ヴァイマル憲法 1919年8月11日制定のドイツ国憲法 Reichsverfassung をいう。ヴァイマルで開かれた憲法制定議会で作定されたため、一般にヴァイマル憲法 Weimarer Verfassung と呼ばれ、20世紀の新しい民主主義的憲法として知られている。

〔制定の経過〕ヴァイマル憲法は1918年11月9日、すなわち第一次世界大戦末期の社会主義革命の結果制定されたことになったものである。革命前にはドイツ全体の憲法として1871年4月16日のドイツ国憲法(ビスマルク憲法ともいう)が行われていた。それは君主主義的色彩の濃い憲法であったが、革命によって帝政は終りをづけ、ビスマルク憲法は効力を失った。革命後の事態收拾にのりだしたのは、独立社会民主党と社会民主党(多数派社会民主党)とであった。両者はともに社会主義政党であったが、独立社会民主党は革命を主唱した左翼政党であって、戦時中社会民主党からわかれたものであり、労働者および兵士の独裁政権の樹立を目的とするものであった。社会民主党は比較的微温的な社会主義政党であって、民主主義を目的としていた。革命によって国家権力は労働者および兵士にうつり、形式的には独立社会民主党の主張が実現したようにみえるが、社会民主党は表面では独立社会民主党と協調しながらも自己の主張を実現しようともくろんだ。19

18年12月16日から19日まで、全国の労働者および兵士の代表者からなる議会(労兵議会)が開かれたが、この議会では労働者および兵士の独裁政権樹立を主張する独立社会民主党の主張はみとめられず、社会民主党の主張どおり、総選挙をおこない、憲法制定のため国民議会を召集することが決定された。これを不満とした独立社会民主党の極左派(スパルタクス団)は共産党を組織して、革命を起そうとし、19年1月6日ベルリンその他に武装暴動が起った。暴動は鎮圧されたが、ベルリンの秩序が不安であったので、同年2月6日ヴァイマルに憲法制定のための国民議会が召集された。憲法制定議会は一連の法律を制定したのち、憲法の制定に着手し、フーゴ・プロイスHugo Preussに憲法の草案を起草させた。草案は数次の修正をへたのち可決され、8月11日大統領エーベルトの認証をへて、8月14日公布、ただちに施行された。これがヴァイマル憲法である。

〔内容〕(1)ライヒ(ドイツ国) ライヒは共和国であり、国家権力は国民より発する(第1条)。大統領は国民の直接選挙で選挙され(第41条第1項)、任期満了前においてもライヒ議会(国会)の提議による国民投票によって免ずることができる(第43条第2項)。ライヒ議会は普通選挙によって国民中から選ばれた議員からなる国民の代表機関であって(第22条、第20条)、法律はライヒ議会の議決により決定される(第68条第2項)。行政の最高機関は総理大臣と閣僚とからなるライヒ政府(ドイツ国政府)であって、総理大臣と閣僚の形式的任免権は大統領にあるが、総理大臣および閣僚はその職務の執行にライヒ議会の信任を必要とする(第52～54条)。大統領は総理大臣または内務大臣の副署によりライヒ議会の解散しうるから(第25条第1項、第50条)、政府と議会とはたがいに他をけんせいしうる関係にある。(2)連邦とラント プロイスはドイツを単一国としようとしたが、邦(ラント)の反対にあい実現しなかった。したがって、ドイツは邦の集合によってできた連邦国家であり、邦はその固有の主権をもち、邦の憲法のもとにその議会と政府とを有する。各邦を代表する中央機関としてライヒ参議院Reichsratがおかれ、ドイツ全体(ライヒ)の立法および行政に参与する。なかでも、ライヒ参議院はライヒ議会の決定した法律にたいし異議をのべうる(第74条)。(3)社会主義 ヴァイマルの憲法制定議会では社会主義政党である社会民主党が議席の多数をしめていたから、社会主義の原則も憲法中に規定されることになった。ことに、私的経済企業を公有にうつすことも可能とされた(第156条)。

〔ナチ以後〕1933年1月ナチが政権にぎり、ライヒ議会の議決をへて、1933年3月24日の「国民および国家の困難克服のための法律」を制定した。この法律は一名「授権法」といわれ、ライヒ政府に法律制定権をあたえ、それによってヴァイマル憲法の規定を廃止することも可能とされ、ヴァイマル憲法は国家の基本法たる意味を失った。しかし、ヴァイマル憲法は第二次世界大戦後制定された東ドイツ憲法および西ドイツ基本法

(ボン憲法)にも多大の影響を与えている。(山田 晨)

ヴァイヤーシュトラース Karl Weierstrass 1815～97 ドイツの数学者。ウェストファリア地方の小さな町、オストフェルデに生まれた。父は税関吏で、むすこを政治家にするつもりで、ボン大学へ入れたが、カールは数学に没頭したので、学位を得ることはできなかった。それで、ミュンスター大学(そのころは学位を授与する資格のない大学)へ1年ほど籍を置き検定試験を受けて、ギムナジウムの教員免状を与えられたが、数学教員の地位は得られなかったので、体操の教師として勤めた。そして1853年まで、全く認められず、学界から孤立していたが、1856年の秋、クンマーの推挙で、ベルリン大学の助教授に登用され、1864年に教授に昇格し、クロネッカーとクンマーとともにベルリンの数学界を指導するに至った。そして、晩年には、200人を越える聴講者を集めたという。彼はゲーダーマンCh. Gudermannの影響を受け、研究の目標をアーベル関数の理論の完成に置いていた。そして、この目的を達成するために、研究はべき級数から出発して、〈解析接続〉の概念の上に解析関数の理論を建設し、経験や直観から独立した解析学を樹立することに力を注いだ。これから、楕円関数の理論を完成し、それを容易に一般化しうる形式に転換することに専念して、アーベル関数の研究への道をひらいたのである。(小堀 憲)

ヴァイル Kurt Weill 1900～50 ドイツの作曲家。ベルリン高等音楽院でフンパーディンクとクラッセルトに学んだのち、1919～20年生地のデッサウでオペラの下げいこをつける仕事をしたり、リューデンシャイトの劇場指揮者をしてオペラの経験を得た。1921年ベルリンに居を定め、同地で24年までブゾーニに師事。1926年ゲオルク・カイザーによるオペラ《立役者》で認められ、その後劇作家ベルト・ブレヒトとの協力による《三文オペラ》(1928)で圧倒的な成功を収めた。これは1728年ころイギリスに行われた政治・社会の風刺劇《乞食オペラ》(ペブツ作曲)にもとづくものであるが、制作後1年間に11ヵ国語に翻訳され、ドイツでは2,000回以上も上演されたといわれる。このような題材の新しい取り方とジャズを取り入れた新鮮な手法はドイツおよび国外で激しい論争的となったが、オペラ《市民》の制作ののち彼はユダヤ人の出であることとその左翼的な傾向のために1933年ナチのドイツを追われ、ロンドン、パリに滞在したのち35年アメリカに渡った。40年以来ニューヨークに定住して、おもにハリウッドのための映画音楽や劇音楽の作曲に従事した。彼はオペラをヴァーグナーの重苦しさから解放して日常的なものに近づけ、おもに対話によって筋を運びながら叙情的なエピソードをはさみ、ジャズの発らつたるリズムと軽音楽の効果を取り入れた簡潔な管弦楽法を用いオペラの新しいタイプをつくり出した。その影響はカール・オルフ、メロッチ、ブリトゥンらの新しいオペラにも見られる。作品には上記のほか、オペラ《マホガニー》《谷へ》《暗黒婦人》、

レビュー《ニューヨーク児の休日》などがあり、戦前日本でも上演されたものに学校オペラ《はいという人》、カンタータ《リンドバーク飛行》がある。なおアメリカの映画音楽に関する論文《映画のための音楽》もある。(渡 鏡子)

ヴァイル Hermann Weyl 1885～1955 ドイツの数学者、理論物理学者。エルムスホルンに生まれ、1908年ゲッティンゲン大学卒業、学位論文は積分方程式に関する研究である。ゲッティンゲン大学講師、チューリヒ工科大学教授、ゲッティンゲン大学教授を歴任したが、33年にアメリカへ渡り、プリンストン高級研究所教授となり、51年に辞して講師となった。晩年はチューリヒで静かな生活を送った。研究は多方面にわたり、しかも基礎的でかつ先駆的な仕事をやっている。理論物理学では、群論と量子力学を結びつけた深遠な業績がある。また数学では群の表現、リー群の研究、リーマン面の研究などがあるが、有理型関数と解析曲線とを関係づけた先駆的業績を発表して、数学界に話題を投じた。(小堀 憲)

ヴァインガルトナー Felix Weingartner 1863～1942 オーストリアの指揮者。ダルムティアのザダルに生まれ、ライプツヒの音楽院と大学に学び、のちリストの弟子となる。ドイツの多くの主要都市で指揮者として名をあげ、1907年にマラーを継いでウィーン国立歌劇場指揮者となり、1927～35年バーゼル音楽院長となる。イギリス、アメリカにもしばしば客演し、1937年には訪日、新交響楽団を指揮した。端正な指揮で、ベートーヴェン演奏の権威ともいわれ、レコードも多数ある。オペラ、交響曲、室内楽曲などの作品もあり、また《指揮法について》《ベートーヴェンの交響曲演奏のための助言》その他の著書を残している。スイスのヴィンタールツールで没した。(渡 鏡子)

ヴァインヘーバー Josef Weinheber 1892～1945 オーストリアの詩人。ウィーンに生まれ、幼くして両親に死別し、孤児院からギムナジウムに通学、1911～32年の間郵便局に勤めたのち、詩作に専心した。自伝的長編小説《孤児院》(1924)ですでにウィーン市文学賞を受け、詩集《貴族と没落》(1934)によって文名を確立した。以後多くの文学賞を得、現代オーストリアの代表的詩人として名声をあげ、1942年にはウィーン大学名誉教授になったが、45年睡眠薬過量で死去した。処女詩集《孤独なる人》(1920)の深刻な厭世(えんせい)観から出発し、《両方の岸辺より》(1923)では夢と現実の相克に悩み、《貴族と没落》にいたって芸術による夢の実現を歌う。早くから表現主義を離脱し、古代の厳格な詩形をとり入れ、荘重な悲歌、賛歌を作り、《遅き王冠》《神々と悪魔たちの間で》を発表、ほかにウィーンの方言を用いた《ウィーンの言葉で》、また遺稿《ここに言葉あり》などがある。(三浦 鞆郎)

ヴァインベルガー Jaromir Weinberger 1896～1967 チェコスロヴァキアの作曲家。プラハ音楽学校でK.ホフマイ



ヴァインガルトナー

スターやJ.クシチカに、またドイツではマックス・レーガーに作曲を学んだ。1922年渡米、ニューヨークのイサカ音楽学校で26年まで作曲の教授をしたのち帰欧、ブラティスラヴァ国民劇場歌劇部主任をしたほか各地で指揮、作曲教授にたずさわった。1937年渡英したが、39年ふたたび渡米し、48年市民権を得た。主要作曲には、歌劇《バグパイプ吹きのシュヴァンダ》(1927、プラハ国民劇場初演)、《愛されし声》《ポーカ・フラットの追放人》(ブレット・ハートの小説による)、《ヴァレンシュタイン》(シラーの作による)、《バラの床》、オペレッタ《春のあらし》、付随音楽(シェークスピアその他の戯曲による)、管弦楽曲《ドン・キホーテ》《たわむれのスケルツォ》《イギリス民謡“大きな栗の木の下に”の変奏曲》、ピアノ・ソナタなどがある。

(二見 孝平)

ヴァヴィーロフ Nikolai Ivanovich Vavilov 1887～1943 ソヴェトの植物学者。栽培植物の起原の研究者として最も著名である。コムギのさび病に対する抵抗性の研究によって名をあげ、作物の平行変異説を立て、彼の終生の研究方向をきめた。彼は栽培植物の変異の最も多く集積している地方を遺伝子中心地と呼び、この地方をその作物の発祥地と考えた。足跡はインドを除いて全世界にわたり、各国の栽培植物の種子を集めた。日本にも1929年に来訪し、各地を視察した。レニングラードの応用植物学研究所長として長くソ連邦の農業とくに育種事業に貢献し、のちソ連邦農業科学アカデミー会長を勤めた。しかしルイセンコ学説が国内で盛んとなり、彼の学説は批判されて1940年失脚、投獄され、ヴォルガ中流にあるサラトフの刑務所で死んだ。

(木原 均)

ヴァヴィーロフ Sergei Ivanovich Vavilov 1891～1951 ソヴェトの物理学者。モスクワ大学でレベデフ Lebedev のもとに学び、母校の教職についたが、帝政ロシアの文部大臣に反抗したかどで、第一次世界大戦の戦線におくられた。革命後モスクワ大学教授となり、1932年レベデフ物理学研究所長、同年科学アカデミー正会員、さらに45年から没年まではその会長となった。光学、ことにルミネセンスに関する研究が多く、強度の弱い光束を観察して直接に光の量子的性格を明らかにしうることを証明し、また、チェレンコフ P. A. Cherenkov らとともに、ある媒質において、その媒質中の光の速度よりも高速度で動く電子から発する微光を発見した。その他物質のケイ光分析法の発展につくし、各種のケイ光灯を発明した。ソ連邦最高ソヴェト議員に選出され、スターリン賞を4度、レーニン勲章を2度受けている。N.I. ヴァヴィーロフの弟であり、また《ソヴェト大百科事典》(第2版)の初代編集長でもあった。

(大岡 明)

ヴァウブジ Wałbrzych ポーランド南西部、ヴァウブジヒ県の工業都市。人口129,800(1977推定)。グロツワフ(ブレスラウ)市の南西67km、チェコスロヴァキアとの国境からわずか20kmのところにある。リーゼン山ろくの炭田地帯にあり、炭坑がある。鉄鋼業、電機工業、精密工

業、毛織物工業、製麻・麻織物工業、製陶業などが営まれている。かつてはドイツ領であり、ヴァルデンブルク Waldenburg と呼ばれていたが、ポツダム会議の結果、1945年ポーランド領に編入されることになった。(鴨沢 巖)

ヴァーカータカ 3世紀後半から6世紀中ごろまでインドのデカンを支配した王朝(Vākātaka)。サータヴァーハナ朝が衰退したのちに、ヴィンディヤシャクティ1世がこの王朝をたて、その子プラヴァーセーナ1世はサムラージ(覇(は)王)と称し、大いに領域を広げて北はブンデルカンドから南はハイダラバードまで及んだ。その死後王国は2分し、主流はナグプル付近に都し、孫ルドラセーナ1世はグプタ朝興起当時最も有力な王であったと考えられる。その孫はチャンドラグプタ2世の娘プラバーヴァティと結婚し、彼女は夫の死後子をたずけて長年統治した。その子孫3代5王はベラールを支配し、時には勢力を広げることがあったが、衰運に傾いた。他の一派は、ハイダラバードの北部とベラール南部を領し、ヴァッサグルマに都した。5～6世紀のころにはハリシェーナが周辺に勢力を広げ、またアジャンターの第16、17窟(くつ)はこの時期に作られた。(山崎 利男)

ヴァーガ ヴァー川 Vah R. チェコスロヴァキア東部を流れるドナウ川の支流。全長約390km。チェコスロヴァキア東部のタトラ山地中に発し、西流してジリナ付近で流路を南に転じ、南部の平野を貫流し、コマルノにおいてドナウ川に合する。(岩塚 守公)

ヴァーグナー Adolph Heinrich Gott-hilf Wagner 1835～1917 ドイツの経済学者、財政学者、統計学者。バイエルのエルランゲンに生まれ、ゲッティンゲンおよびハイデルベルクの両大学で法律学・国家学を学び、1858年ウィーンの商業大学が開設されるや、そこの正教授に迎えられ、経済学・財政学の講義を担当し、以後広い意味での経済学者として多方面な活躍をはじめることとなった。彼の学問の特色は、(1)きわめて現実的・実証的であること、(2)国家の経済政策が、常に主導性をもつべきことを考慮していること、(3)道徳・倫理が経済活動を指導しなければならないと信じていること、である。(1)については、彼が若くしてオーストリアの金融・財政制度の改革に参与し、鉄道や通貨の問題をはじめ労働問題、土地問題などの時事的な問題に多大の興味をもったこと、および、のちに統計学の講義をもつようになって、メンガー C. Menger の演繹(えんえき)法的立場の統計学に対立する帰納的立場に終始した点などにみとめられる。彼が歴史学派に属するものと考えられるのは、これらの事情によるものである。また(2)については、元来マンチェスター学派の自由貿易主義・自由放任主義から出発して、現実の経済問題・社会問題ととりくむうちに、国家の経済政策を強力かつ広範囲に推進することによって、社会化へ方向をみつけようとした。彼のいわゆ

る〈国家社会主義〉は、このようにして、自由放任主義とも対立し、また社会民主主義とも対立する。このことは彼の有機的国家観に由来し、同時に彼が財政学におけるドイツ官房学派の大成者でもあったゆえんである。最後に(3)の点について、彼は1871年にいわば倫理学としての経済学ともいふべき〈新経済学〉というものを提唱したことがある。このように道徳による経済の支配を念願する彼にとっては、それが経済学上では〈新経済学〉の提唱となったが、政治の上でも彼は1881年〈キリスト教社会党〉には入り、のちにはその総裁ともなった。この間、1873年にはシュモラーを中心とする〈社会政策学会〉の創設に参画したが、このことも彼の立場をよく説明している。

(島津 亮二)

ヴァーグナー Gottfried Wagner 1831～92 ドイツの化学技術者で明治時代前期の日本工芸界の指導者。ワグネルと記されることが多い。ハノーヴァーに生まれ、ゲッティンゲン大学で化学を専攻した。1868年(明治1)日本にきて、明治期の工芸や化学方面の発達に大きな貢献をした。中でも窯業については来日とともに有田の製陶に化学的指導をなし、のち、東京にきては西洋の窯技、材料の普及に力を尽し、そのもとからは加藤友太郎のようなわぐりに多くの発明をした名工も現われた。自らも浅草蔵前東京職工学校や牛込の陶器試験所内に洋風窯を築いて研究したが、絹紙に描いた日本画の趣を窯技で現わすくふうをし、1885年ころにその目的を達し、さらに各色を出しうるまでにいたった。これを吾妻(あずま)焼と名づけ、のち旭(あきひ)焼と改称した。また学校で化学の教授をしたし、七宝(しっぽう)の改良や、京都舎密局の陶磁染色の研究事業にも関与した。日本工芸に深い愛情と理解をもち、73年のウィーン万国博覧会をはじめ、内外博覧会にはその紹介に努めるなど、工芸界に尽した功績は絵画におけるフェノロサと並び称せられる。東京で没した。

(中川 千咲)

ヴァーグナー Otto Wagner 1841～1918 オーストリアの建築家。ウィーンおよびベルリンで学び、1894年以後はウィーン美術学校教授となり、理論と設計の上で近代建築の指導者となった。彼は、芸術創作の出発点は現代の生活にあるという信条から、新しい形式はすべて現代の新しい要求をみだすものでなければならぬと考え、19世紀に流行した過去の歴史的様式の模倣に反対して、いわゆる〈実用様式〉Nutzstilの実現を主張した。建築形式を目的、材料、構造に即したものと考える彼の建築観はゼンパーの理論の発展といえよう。しかし、初期作品にはルネサンス様式の色彩が強く、上述の主張にもとづく単純な形態は後期の作品において実現される。ウィーン・カールス広場停車場(1894～97)、ウィーン郵便貯金局(1904～06)はその代表的な例である。建築の社会的機能を認識した彼は、晩年には建築を大都市のなかの集団として考えるようになり、多くの計画をのこしたが実施されたものは少ない。彼の思想は、当時のアカデミックな保守的な思想に新風を吹きこんだものというべきで、その

すぐれた門弟オルブリヒ、ヨゼフ・ホフマンらは、師の思想をセセッション運動へと発展させている。上記のほか、おもな作品はヴィーンのノイシュティフトガッセのアパート(1902)、ハーグ平和宮の計画(1906)、ヴィーン市立博物館の計画(1908)などである。(阿部 公正)

ヴァーグナー Richard Wagner 1813~83 19世紀のドイツ最大の歌劇作曲家。ワ(ー)グナーともよばれる。音楽史のほか、文学史にも明白な席をもつ特異な両面的天才で、音楽史では初期ロマン派のあとをうけて同派を大成した最高峰、文学史では新ロマン派の戯曲領域における一巨峰である。

〔少年時代(1813~32)〕父は警察書記、母はパン屋の娘で、両親の第9子として、1813年5月22日、ライプツヒに生まれた。半歳のとき父を失い、母が俳優ガイヤーと再婚したので、ドレスデンへ移住したが、この継父をも8歳のとき失った。9歳のとき十字教会学校へ入学、家庭ではピアノ教師についたが、かねてからヴェーバーの歌劇に熱中して、運指の練習をきらったため、ついに一生のあいだ演奏技術をもたなかった。11歳のとき学校で詩の競作に優勝、文学にふけて、13歳でシェークスピア模倣の悲劇を書いた。14歳のときライプツヒへ帰住してニコライ学校へ転学、15歳のころベートーヴェンの音楽に初めて接し、感動のあまり音楽家になろうと決心したという。独習で作曲を試み、文学はホフマンを読みふけたが、17歳の6月、トマス学校へ転学、翌月パリの七月革命(1830)によって政治的関心を強められた。同年冬、試作の序曲を初めて公表して失敗、18歳のときライプツヒ大学で音楽と哲学を聴講したが、身をもちくずして中退。あらためてトマス学校の合唱指揮者ヴァインリヒについて短期間に楽理を習得、各種作品をさかんに試作したが、比較的世評のよかった《ハ長調交響曲》がメンデルスゾーンから黙殺されたことは、後年の両者不和の一因となった。

〔遍歴時代(1832~39)〕19歳の夏、上記の交響曲をたずさえてヴィーンへ行ったが志を得ず、帰途、歌劇《婚礼》の台本を書き、帰国後作曲して、後年の作詞作曲の先例をひらいた。翌20歳のときヴェルツブルクに歌手の兄をたずねて、歌劇の実際面を習得、翌年歌劇《妖精(ようせい)》を完成、まもなくマクデブルク歌劇団の音楽指揮者として初めて自活、23歳の春、歌劇《恋愛禁制》を完成、むりに上演して失敗、劇団解散のため失業し、以後、求職と失業の反復がはじまった。美しい女優ミンナ・プラナーのあとを追って、東プロイセンで強引に結婚したが、転々と職をもとめてロシア領リガまで流浪し、小劇団の指揮者をつとめながら娯楽的作品を作曲中、自己嫌悪(けんお)をおぼえて、はじめて本格的な野心作《リエンツィ》に着手した。26歳のときまたもや失業、成功の夢と借金のがれとのため、リガを逃亡して海路パリへ向かったが、洋上大暴風雨にあい、幽霊船の伝説を体験的に味わった。

〔パリ放浪時代(1839~42)〕無名のドイツ作曲家は、パリでは相手にされず、売

文や編曲のほか写譜までして、わずかに生活をささえた。しかしその悲惨な生活によく堪えて下記兩作を完成した(以下添えた二つの年代は、作詞着手と作曲完成を示す)。

《リエンツィ》Rienzi, 5幕(くわしくは《さいごの護民官リエンツィ》, 1837~40)。素材はイギリスの作家ブルワーの同名小説で、14世紀の護民官リエンツィが貴族に抗してローマ市民の自由を回復しながら、誤解をうけて殺され自由も滅びるという《大悲歌劇》。思想的には青年ドイツ派の影響がみられる革命をたたえるような作品で、音楽はなお模倣要素が多いが、管楽器の効果的な駆使が、台本の戯曲性の強さとともに、すでに十分個性的である。《さすらいのオランダ人》Der Fliegende Holländer, 3幕(または《さまよえるオランダ人》, 1841)。素材は、永遠のユダヤ人の伝説をハインェが小説化したもので、永遠にのろわれた幽霊船の船長が純情な少女の愛によって救われるという《ロマン歌劇》。すでにいわゆる《救済》の主題の明白な作品であり、音楽的にも指導動機や半音階の使用が《楽劇》的特性をはのめかしている。

上記の兩作品が幸運にもドイツで採用されることになったので、29歳のヴァーグナーは勇躍帰国したが、苦難のパリ時代に書いたものでは、楽劇論のきざしをふくむ《ベートーヴェン詣で》(1840)、生活苦と信念を反映する《パリ客死》(1841)の短編小説兩編も知られている。

〔宮廷劇場指揮者時代(1842~49)〕ドレスデンにおける《リエンツィ》《オランダ人》兩歌劇のあいづつ初演によって、ヴァーグナーは、宮廷劇場第二指揮者に任命され、創作も円熟味を加えた。

《タンホイザー》Tannhäuser, 3幕(くわしくは《タンホイザーとヴァルトブルク城の歌合戦》, 1842~45)。素材は中世の恋愛歌人伝説と歌合戦伝説で、主人公タンホイザーが愛欲の女神に迷って教皇からもゆるされなかった罪深さを、城主の姫君が純愛で救うというやほい救済主題の《ロマン歌劇》。戯曲の深化と旋律美の豊かさは《オランダ人》をはるかにしのいでいるが、依然として番号形式が残っている。《ローエングリン》Lohengrin, 3幕(1845~48)。素材は13世紀の叙事詩や、白鳥の騎士の伝説などで、弟殺しのぬれぎぬを着せられた公女が白鳥の騎士に助けられながら、誓いにそむいたため騎士に去られるという《ロマン歌劇》。戯曲と音楽が一つにとけ合った甘美な作品で、前作とならんで後世最もひろく知られた愛されていく。

なお宮廷指揮者時代には、ベートーヴェンの《第九交響曲》への開眼的な指揮および解説(1846)のほか、ロンドンからドレスデンへの先輩ヴェーバーの遺骨の改葬(1844)のような業績がある。しかるに1848年の二月革命が翌年ドレスデンへ波及するや、ヴァーグナーは宮廷指揮者でありながら革命騒動に参加したため、逮捕状を発せられて、国外逃亡のやむなきにいたった。

〔亡命時代(1849~64)〕はじめの9年間は主としてチューリヒに住んだが、《未来の芸術作品》(1849)、《歌劇と戯曲》(1851)など一連の論文によって、いわゆる

総合芸術論をはなばなく展開した。その主旨は、文学と音楽と舞踊という三つの《純人間的な芸術種》が常に戯曲にのみ結びつくべきであるという考え方で、ギリシア悲劇に理想をもとめつつ新芸術の理論的体系化を試みたものである。作品としては《ニーベルングの指環》(後述)に着手したが、チューリヒでの後援者ヴェーゼンドンクの若妻マティルデとの相愛、およびショーペンハウアーの厭世哲学への傾倒によって、《指環》は中断されて《トリスタン》がまず完成された。以下はいわゆる後期作品である。

《トリスタンとイゾルデ》Tristan und Isolde, 3幕(1857~59)。素材は中世の同名叙事詩ながら、悲恋の体験と厭世哲学との裏づけによって、《死へのあこがれ》にみちた異常な迫力をもつ作品。簡素な詩形の深い内容を、半音階や不協和音やいわゆる無限旋律の手法によって、痛切に響きわたらせるこの傑作は、近代音楽的な無調性さえおびえていて、それまでの《ロマン歌劇》とは全然別種の観がある。そのため世に《トリスタン》以降の作品は《楽劇》とよばれるが、この名称は通称で、ヴァーグナー自身は否定している。生活のため彼は各地を指揮旅行したが、パリでの《タンホイザー》改作版上演の不成功(1861)、ヴィーンでの《トリスタン》上演企画の不成功(1862)などのため、生活的にも芸術的にも絶望状態におちいった。

〔国王殊遇時代(1864~72)〕南独バイエルン国の19歳の青年国王ルードヴィヒ2世の招きによって、51歳のヴァーグナーは、とつぜん国資格でミュンヘンに移り、生活を保証されつつ創作に専念しうることになった。しかし、しっと者たちのため、翌年再びスイスへのがれ、ルツェルン郊外トリーブシェンに移って、まず下記作品を完成した。《ニュルンベルクのマイスタージンガー》Die Meistersinger von Nürnberg, 3幕(日本での通称《名歌手》, 1861~67)。中世の手工業者で詩人、歌手、作曲家を兼ねた工匠歌人(親方歌手)が大ぜい登場することの作品が、ふたたび《歌劇》という銘を打たれているのは、部分曲やアンサンブルや舞踊までも含んだ形式のためと見てよく、ホフマンの小説その他にもとづいた歴史的素材も特徴的である。くつ屋の親方ザックスが、市民籍をもとめる若い騎士をたずねて歌合戦に勝たせ恋人をも得させるといふ運びのうちに、親方自身の《あきらめ》や邪恋者の失敗をも織りこんで、ドイツの民衆芸術を賛美したほがらかな作品。全音階的な快活さが前作とは対照的である一方、指導動機やシュプレヒスティンメの手法ゆえに、銘は《歌劇》でも《楽劇》とよばれるのを常とする。

国王殊遇のおかげで前作もこの作もあいついで初演されたが、反メンデルスゾーンのな《指揮について》(1869)、音楽哲学論文《ベートーヴェン》(1870)、未完成の自叙伝《わが生涯》(1870)などもこの時代に属する。リストの娘で、ハンス・フォン・ビューローの妻であったコジマと、ヴァーグナーが同居のうえ正式に再婚(1870)したことは、上記自伝のゆがめられた面とともに、後世しばしば非難される。



R. ヴァーグナー

グロが描いたヴァグラムの戦



〔大成時代(1872~83)〕舞台下にオーケストラをかくす多年宿望の劇場が1872年5月バイロイトに着工される直前、ヴァーグナーはこの地に移った。《ニーベルングの指環》Der Ring des Nibelungen (1851~74)。正式な名称は、《序夜および三部作から成る舞台祝祭劇》ながら、事実上は四連作であり、1.《ラインの黄金》1幕、2.《ヴァルキューレ》3幕、3.《ジークフリート》3幕、4.《神々のたそがれ》3幕から成る。中世の有名な《ニーベルングの歌》よりも、むしろヴェルズング伝説や《エッダ》などに関係がふかい。上演に連続4夜を要する歌劇史上空前の巨作《指環》の内容を、あえて約言すれば、世界支配的な権力の象徴である黄金の指環をめぐる、小人種族と北欧主神との両者の権力闘争の過程を描き、さいごに両者滅亡という旧世界いっさいの没落のうちに、世界不正の根源や運命を暗示した作品である。音楽的にも指導動機や無限旋律やシュプレヒシュティンメのほか、すぐれた描写の要素もあり、ヴァーグナーの手法のいっさいが集大成されている観がある。初演はバイロイト祝祭劇場のこけら落としとして1876年8月におこなわれ、新ドイツ帝国(1871成立)皇帝やバイエルン国王のほか、全ヨーロッパから芸術家たちが集まって盛況をきわめた。

《パルジファル》Parsifal, 3幕(1857~82)。素材は中世のイギリスの叙事詩その他で、聖杯奉仕の王者が、魔女への愛欲にまよって重傷を負ったのを、くきよき愚か者パルジファルが救うという依然救済主題の作品ながら、この《舞台清祓(せいばつ)祝祭劇》では、《トリスタン》以来の意志否定的な要素が再生思想の方向をあげている。音楽的には《ローエングリン》をやや連想させる神秘的なふんい気に、さらに宗教的な影響が加わり、無限旋律や不協和音の技巧も一段と高められている。

1882年7月の初演後、ヴァーグナーは病弱保養のためヴェネツィアへおもむい

たが、翌1883年2月13日、心臓障害のため急死した。遺体はバイロイトへ移され、私邸ヴァーンプリート邸内に葬られたが、奮闘に終始した70年の一生における巨大な成果は、後世にはかりしれない影響をあたえた。初期の《リエンツィ》以降の作品が、今日なおすべて上演されることも驚異的である。(高木 卓)

ヴァーグナー・フォン・ヤウレグ Julius Wagner von Jauregg 1857~1940 オーストリアの精神科医。1889年から93年までグラーツ大学の精神神経科の助教授として活躍し、次いで1928年までウィーン大学精神科教授の職にあった。多くのすぐれた研究を発表したが、それらのなかで最も有名なのは進行性麻痺性痴呆(ちほう)のマラリア療法で、1887年以来その研究をつづけておこなった。1917年によりよくマラリア接種療法を完成し、これによって27年にノーベル医学賞を授けられた。その他遺伝性問題、法医学的精神学に関する基本的研究をおこなった。《臓器療法教本》の著がある。(大島 蘭三郎)

ヴァグラムのたたかい ヴァグラムの戦 1809年7月5~6日、フランス皇帝ナポレオン1世の軍とオーストリア軍との間に行われた戦争。ナポレオンはイギリスの経済力を弱めるために1806年から大陸封鎖を行い、08年には自らイベリア半島に遠征したが、この間にオーストリアはイギリスと結んでナポレオンに対抗し、09年4月開戦した。ナポレオンは迅速に兵を進め、5月13日オーストリアの首都ウィーンは落ちた。しかしオーストリアは、21日のドナウ東岸アスペルンの戦で反撃し、一時はナポレオンを危地に追いこんだ。ナポレオンはロバウ島を根拠地に兵力の増強に力を注ぎ、7月、ふたたびドナウを渡河してウィーン近郊の小村ドイッチュ・ヴァグラム Deutsch-Wagramに陣取るオーストリア軍を攻め、2日間の戦いで完全にこれを撃破した。オーストリアは休戦を請い、10月シェンブルンで和議が結ばれた。(金沢 誠)

ヴァーゲート Virgate 中世イギリス農民の標準的土地保有面積で、ヤードランドyardlandともいう。その大きさは、いちばん小さい場合は15エーカー、いちばん大きな場合は80エーカーというように、地方によってかなりの差異があったが、30エーカーが普通のものである。これは1ヵ所にまとまっておらず、開放耕地の諸所方々におおむね細長い地条stripとして散在していた。(小松 芳喬)

ヴァーゲマン Ernst Wagemann 1884~1956 ドイツの経済学者。とくに景気予測における業績によって有名。南米チリに生まれ、ゲッティンゲン、ベルリン、ハイデルベルクの各大学に学び、のちベルリン大学の教授となる。その間、兼職として、プロイセン農務省の行政委員、統計局長官などをつとめ、1925年、ベルリン景気研究所(現経済研究所)所長となり、1949~53年までチリのサンティアゴ大学教授もつとめた。彼の名を高くしたのは、この所長としての景気予測上の業績であり、その研究所はアメリカのハーヴァード研究所と並んで、長く景気観測のメッカであった。彼の指導する景気観測法はきわめて経験的な方法で、論理的に景気変動の原因を追求するというよりは、各変動要因の相関関係を重視して景気変動の徴候をとらえることに努力し、貴重な統計資料を続々と発表した。なお彼には、これら景気論上の業績とならんで、貨幣理論に関するきわめて実証的な研究があり、指図(さしず)証券説の立場に立つ有力な貨幣学者であった。(島津 亮二)

ヴァーサ Vaasa フィンランド西部、同名県の主都。人口54,406(1975推定)。旧名ニコラインカウプンキNikolainkaupunki、またスウェーデンではニコライスタットNikolaistadと称した。ヘルシンキ北西352km、ボスニア湾に面し、鉄道の終点で、この地方の行政・経済の中心地である。織物・電気機器・油脂工業、木材工場があり、木材・木製品の輸出港である。近代建築が多く、東ボスニア歴史博物館、市立図書館などは著名である。(渡辺 一夫)

ヴァサちよう ヴァサ朝 デンマークに対する独立戦争を完遂したグスタフ1世ヴァサVasa(Wasa)のはじめたスウェーデンの王朝(1523~1654)。この王は、スウェーデンにルター派の新教を導入して国教とし、世襲王政の原理を確立、ハンザ同盟の諸特権を制限、後にそれを廃止して国家の統一を固めた。その後、三十年戦争に介入したことで有名なグスタフ2世アドルフの下でスウェーデンは北欧の大強国にのし上がった。彼はデンマーク、ロシア、ポーランドとも戦い、スウェーデンのバルト海支配を完成させようとした。その娘が有名なクリスティナ女王であるが、彼女はやがて王位をいったこカールに譲ってヴァサ朝時代は終わった。この時代はスウェーデン史の最もはばばない時代であったといえよう。(島田 雄次郎)

ヴァサーリ Giorgio Vasari 1511~74 イタリアの画家、建築家、歴史家。トスカナのアレツォに生まれる。14歳のときコルトナの枢機卿シルヴィオ・パッセリニに連れられてフィレンツェに出、ミケランジェロ、アンドレア・デル・サルティに師事し、生涯メディチ家に仕えた。メディチが追放されたとき一時故郷に帰る。その後フィレンツェ枢機卿(メディチ家出身)の力によりローマに出て絵を学び、アレックスandro公、コシモ大公に仕え、多くの画作をした。ローマのカンチェレリアに《教皇パウルス3世の事績》、フィレンツェのパラッツォ・ヴェッキョの大広間の壁画、サンタ・マリア・デル・

ヴァサ朝系図 (年代は在位期間)



フィオーレ聖堂の円天井の壁画、ヴァティカン・サラ・レジアの壁画など大壁画を、先輩の構図などを利用して、文学趣味をおりまぜて誇張して、きわめて短時日に描いた。建築としてはウフィツィの設計、ピサのサン・ステファノ・ディ・カルヴァリエリ、アレツォのバディアなどが傑作である。画家としては独創性にとほしく、当時たえられた大画家の名声ほどの真価はない。なおスペイン王の招きも受けたが、実現しなかった。故郷アレツォにおいては最高名誉職についた。彼は芸術家としてはそれほどの才能は認められないが、その名を不朽ならしめたのは、ルネサンスの美術家の伝記《著名な画家、彫刻家および建築家の生涯》の著作によってである。1550年初版、68年改訂増補して第2版が出版された。その資料の収集の広さと豊富さからルネサンス美術を知る必読の書とされている。アレツォには彼の設計になる《ヴァッサーリの家》が現存し、彼に関する資料が保存されている。(三輪 福松)

ヴァージニア Virginia アメリカ合衆国東部の州。大西洋岸の中央部に位置し、北はボトマック川、西はアラバチア山脈、南は北緯36°22'の緯線を境とする。面積101,993km²、人口5,032,000(1976推定)、人口密度49.3人/km²、州都はリッチモンド。州の独立は1788年で独立13州の一つ。

〔自然〕ほぼ南北に走る瀑布(ばくふ)線で西のアラバチア山系と東の大西洋海岸平野に分れる。前者は東部から順次、(1)標高100~300mのピーモント準平原、(2)州の最高点(1,745m)と数個の横谷をもつ狭長なブルー・リッジ山地、(3)広狭さまざまな谷と細長い尾根が約10列並走するヴァージニアの谷、(4)炭田をもつアラバチア山脈東斜面、から成る。海岸平野は低平砂質で、出入の多いチェサピーク湾やボトマック、ジェームズなどの川の入江があり、典型的な沈降海岸地形を示す。気候は温帯東岸型で、7月は平均気温26℃で暑いが冬は4℃内外で温和、年降水量1,000mm以上でやや多い。自然植生は西部がカシ・クリ・ポプラ型の森林、東部はカシ・マツ型で、後者はまだ平地にも多く残っている。

〔産業・社会〕州の二大農産物はヴァージニア葉できこえるタバコとリンゴで、ピーモントとヴァージニアの谷が主産地である。海岸平野はワシントンはじめ北方の大都市向けの野菜とジャガイモ、落花生を多く産する。しかし作付面積で最も多いのは牧草とトウモロコシで、耕地150万haの3割を占め、コムギがこれに次ぐ。したがって農業収入(10.4億ドル)では畜産によるものが54%で作物収入より多く、肉畜、酪農、養鶏いずれも盛んである。鉱業は石炭が3,580万t、マンガン、雲母、チタンも産する。工業は付加価値83億ドルで、おもにタバコ、レーヨン製品、造船業が盛んで、その他各都市に分散している。州都リッチモンド(人口約23万)は政治・商業・鉄道の中心で、航洋船も出入し、タバコ・肥料・製紙工業をもつ。ジェームズ湾口のハンプトン水道には南岸にノーフォーク(29万)、ポーツマス(11万)、北岸にニューポート・ニューズ(14万)があり、この3市はアラバチ

ア炭田の石炭積出港として全国一の輸出トン数を誇り、造船・肥料・機械・紡織・輸入農産物加工も盛んである。ブルー・リッジを横断する交通上の要点にはロアノーク(11万)、リンチバーグ(5万)、シャーロットヴィル(4万、州立大学の所在地)の3都市が並び、ピーモントの地方的中心都市にはダンヴィル(5万)とピーターズバーグ(4万)がある。綿花をほとんど産しないこと以外は、合衆国南部共通の社会的特徴と問題をもっており、黒人は約95万(19.0%)を占め差別待遇が残っている。農村と都市の人口比率は37%、63%となっているが、前者では長年の耕作による地力低下と土壌侵食に悩む自給的貧農が多く、州内都市と北部の工業州への人口移動が著しい。工業発達の有効な一要因はこの低賃金労働力であったが、現在では北部と大差ない労働条件に改善された。(土井 喜久一)

〔歴史〕ヴァージニアの歴史は、1585年サー・ウォーター・ローリーによる植民地建設の企てに始まる。処女王であったエリザベス1世にちなんでこの名称がある。この企ては疫病とインディアンとの襲撃によって失敗したが、1607年、国王の特許状を得たロンドン会社(通常ヴァージニア会社と呼ばれる)の手によって、144名のイギリス人が3隻の船で大西洋を渡り、ジェームズ河畔にジェームズタウンというアメリカ大陸最初のイギリスの恒久的植民地が建設された。今日のアメリカ合衆国の歴史は通常ここに始まる。主として疫病のため、移住者の生活は困難をきわめ、1年後にはわずか38名が生き残ったにすぎないが、ジョン・スミスの指導下で1608年には2回の移民と補給が到着し、ようやく開拓の歩がひらかれた。しかし、1609~10年には再び飢饉に襲われた。土地と家畜は最初は共同所有とされたが、1612年の新しい特許状によって、各人にそれぞれ125haの土地が与えられ、またジョン・ロルフによってタバコの栽培が成功し、植民地の基礎が確立した。1624年、特許状は無効とされ国王直轄植民地となったが、これよりさき1619年にはアメリカ大陸最初の代議制議会が設立され、国王の任命する総督と人民の選挙による植民地議会によって政治が行われることとなった。1619年にはまた、はじめて婦人の移民が到着し、また黒人奴隷がオランダ人の手によって西インドから移入され、ここにプランテーション制度によるタバコの栽培が確立した。また一方労働力として多くの年奉公移民がロンドンから到着した。しかし年奉公移民は年季が終了後自営農民あるいは職人となったので、プランテーションの労働力はしだいに黒人奴隷によって代えられるようになった。また、清教徒革命によってピューリタンが政権を握るや、イギリスの富裕階級の一部はヴァージニアに移住し、これが南部の保守的な要素を構成することになった。1676年にはフロンティア小農のプランターおよび総督に対する反感からベーコンの反乱が起ったが、失敗に終わった。その後独立革命までは、経済発展と開拓が進展し、13植民地中最も人口の多い植民地となった。独立革命にさいしては、マサチューセッツとともに革命の指導的役割を占め、多く

の建国の偉人たちを輩出した。1776年には独立宣言に先だって州憲法を制定し、総督およびロイヤリストを追放し、パトリック・ヘンリーを初代知事に選り、ついで宗教自由令、限嗣相続制の廃止などの改革を行った。南北戦争にさいしては、南部盟邦に加わったが、その利害は必ずしも南部諸州と一致せず、西部ヴァージニアは分離して1863年新たにウェスト・ヴァージニア州をつくった。1870年再び連邦に復帰したが、再建の時代を通じて経済的・政治的困難を経験し、それ以来経済的には合衆国内においての重要性を失った。しかし第二次世界大戦中、造船業が興り、タバコ工業とともにヴァージニアの主要産業となっている。

(中屋 健一)

ヴァージニアしゅうきょうじゅうれい ヴァージニア宗教自由令 **Virginian Statute of Religious Liberty** 人間の基本権の一つである信教の自由を最も徹底した完全な姿で制度的に確立した最初の立法。1786年独立革命以後のアメリカ合衆国のヴァージニア州において制定され、国家と教会との分離を実現確立したものとして重要視される。独立革命によって独立の州となった各植民地は、ヴァージニアをはじめ、相ついで権利章典をふくむ新憲法を制定し、信教の自由を原則的に宣言規定したが、元来イギリス国教たるアングリカン・チャーチをその国教としていたヴァージニアでは、さらにこの法の制定により、信教の自由を勝ち得たのであった。その起草提案者は独立宣言の起草者トマス・ジェファソンであり、独立革命が一つの社会革命といわれるのは、この法律の制定に負うところが大きいといわねばならない。またそれはアメリカ人の人類にたいする一大貢献といえよう。

(中屋 健一)

ヴァジリキとうき ヴァジリキ陶器 ヴァジリキはクレタ島東部のヒエラペトラ地峡にある町で、ミノア初期金属文化期の共同生活的住居址が知られている。ここから出た地方色豊かな土器は〈ヴァジリキ陶器〉Vasiliki Wareといわれて、当代の代表的工芸品である。きわめて精良な粘土を使い、焼きは堅く、すでにろくろを用いている。長大な注口付の水指(みずさし)、把手(て)のあるコップ、鉢、甕(しこ)などの器形が多く、また金属容器を模したものがあって、継目にとめた鋳(ひょう)の影を写したものもある。しかし最も特色があるのは彩色で、赤色または暗かっ色地に黄色の斑文が黒い輪郭を添えて施されており、色彩の変化ならびに対照の妙をもって賞美されている。(樋口 隆康)

ヴァジリキ陶器の柄付水指2点

